
シロ×クロ

あらた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シロ×クロ

【Nコード】

N3258U

【作者名】

あらた

【あらすじ】

金色に輝く瞳を持つ少女スミレは、偶然訪れた国で得体の知れない妖魔に襲われる。スミレを救ったのは刀を携えたクロだった…。国の王子シロに支えるクロと、シロが率いる『純正団』。意地悪で俺様なシロとの出会いによって、スミレの運命は突然動き出す。

【薄紅の雨が舞う中で】（前書き）

突然すみませんm（――）m

こちら新作『シロ×クロ』のプロローグとなります!!:

【薄紅の雨が舞う中で】

—ここが俺の最期の場所

小高い丘の上に大きな桜の樹がある。

その根本で、散り行く桃色の花びらに包まれながら終わるのも悪くない。

ここから見渡す限りは血の海。

たくさん血を浴び生きてきた。

薄紅の雨が降る。

胸には一太刀の深い傷。

頭からは紅い血が滴る。

全身に傷を負っているが、胸の傷が致命傷となっているのは間違いない。

「…」

空に向かって手を伸ばす。

ひらひらと花びらが手のひらに落ちてくる。

それらはするりと指先を通り抜ける。

掴むことも出来ない。

ゆっくりと目を閉じる。

傍らの赤く錆び付いた刀を握ろうとしても力が入らない。

最期の淡い景色を瞳に焼き付け終わりを待つ。

ふと、温かい何かが手に触れた。

「ここで終わるのか？」

優しくも切ない男の声が聴こえてきた。

もう胸の傷も痛みは感じない。

感覚は失われているはずなのに、触られた手の温もりだけが何故か身体中に染み渡る。

「この私のために生きると誓え。お前を生かしてやろう」

男の声が耳元で聴こえたが、返事することさえ出来ない。

だが、体は勝手に頭を下げた。

「全てを忘れ、生きるのだ」

男はそう言つと、俺の額に手を当てた。

ただ、温かく優しい何かに包まれた。

そこで、俺は一度人生を終えた。

【薄紅の雨が舞う中で】（後書き）

新作『シロ×クロ』は近日中に更新予定です!!

どこかで見かけましたら、お立ち寄りください（＾－＾）ゞ

第1章 いつかの物語（前書き）

やっと、投稿開始です!!

長い目で見てやってくださいm (____) m

第1章 いつかの物語

「おいスマレ、もっと早く歩け」

「は、はいっ」

スマレと呼ばれた少女は、城を出て、庭園へ続く道を態度の大きい青年の後ろ姿を見失わないように、小走りですいていく。

その青年は優雅に白いマントをなびかせながら、スマレの前を歩いていた。

その姿は気品に満ちている。

青年の歩いた後には微かにバラの香りが残っていた。

「シロ王子、一体どちらへ行かれるのですか？」

「…シロ様と呼べ」

「すいません…シロ様…こんなところまで来て、クロさんに見つかったら怒られますよ…」

「…クロなんかどうでもいい」

シロは全く振り向かず返事をする。

その背中からは苛立ちを感じさせた。

これ以上は余計なことは言わず、黙っていた方が得策だと、スマレは口を閉じる。

まだ日も出ていない明け方。

スマレはシロに急に叩き起こされ連れ出された。

城の敷地内だと言うのにもうだいぶ長い時間歩いている。

シロは歩く早さを緩めない。

そのうち、城内でも、一番高く見晴らしのいい丘の上に出た。
ここからは城下街が見渡せる。

まだ街は眠っているように静かだった。

「寒い…」

「そんな格好で来るからだ」

突然起こされて着替えも出来ないまま薄着で連れ出されたのだ。
太陽の暖かさもない時間帯はスミレの体を冷やす。

「…来い」

シロが自分のマントを開いてその中に来るようにと促した。

スミレは一瞬戸惑ったが、ここで断つても、シロに何をされるかわからない。

そして、スミレはシロの懐に入った。

心地のいいバラの香りに迎えられる。

次の瞬間、マントは閉じられスミレは肩を抱かれた。

スミレの心臓は大きく跳ね、体温が一気に上昇する。

視線を上げると、シロの整った顔が近くにあり、改めて綺麗な人だ
と思い知らされた。

だがシロは一切スミレを見ず、街の彼方を見つめている。

別にシロにとっては何でもないことだ。
そう思うと、だんだん気持ちが悪く落ちてきてきた。

だけど、この時間がずっと続くのもいい。

と、贅沢な願いを抱いたが、それは叶わぬことと、首を振る。

やがて、地平線がゆっくりとオレンジ色に染まり始めた。

「朝ですね」

時間をかけて太陽が昇り出す。

真っ暗だった街に白いもやがかり、日差しで街が輝き出した。

一日の始まり。

「きれいですね…」

まさかシロとこんなロマンチックな光景を二人だけで見ることになるなんて、夢のようだと感傷的になる。

「そうだな…」

意外にも優しい声で返事をするシロ。

また、シロの顔を覗き込もうとそっと視線をあげた。

「！」

さっきまで遠くを見ていたはずのシロの視線はまっすぐにスマイレを見つめていた。

白い髪が朝日に照らされ金色に輝き、風に靡く。

その青く透き通った瞳はスマイレを捕らえ見据える。

「シロ様!？」

見つめられ驚きと戸惑いで体が緊張して動かなくなった。
シロの眼差しに耐えられなくなり、目を反らそうとする。

「動くな…」

スマレの肩を抱く手に力が入った。

反対側の手のひらがスマレのほほに触れる。

シロの手はひんやりと冷たくて、スマレの火照る体を冷やした。

スマレの顔は完全にシロへと向けられる。

次の瞬間何が起こるのか…
期待と不安が胸を交錯する。

「素晴らしい!!」

シロの指がスマレの片目を思いつきり開いた。

「イタタタツゝ痛いです!!」

「動くな!!」

顎を捕まれ強引に顔を引き寄せられる。

開かれたスミレの片目は黄金に輝き、その瞳孔にはどこのものかもわからない文字が刻まれていた。

それが朝日でくつきりと浮かび上がっていた。

始めからこの為だけにスミレを連れ出したようだ。

それを黄金に光らせるにはスミレが力を発動させるときだけなので、じっくり見れる機会を自分なりに考えて実行しただけだった。

「シロ様…何をなさっておるのですか!？」

突然、後ろから聞いたことのある男の声。

「チツ、クロか」

振り向くとそこには黒い髪に赤い瞳、シロよりも大人びた雰囲気、着物姿のクロが立っていた。

身の危険を感じたスミレは、シロの一瞬の隙を見て、クロの元へ駆け寄ろうとする。

その時、シロのマントが足に絡まり、スミレは勢いよく地面に飛び出してしまふ。

「うわあああ」

しかし、スミレが叫ぶより早く、巻き込まれたシロが白い塊となつて、スミレに向かって倒れてくる。

そして、二人とも地面に転がった…

「あ、あれ？」

だが、スマレは固い地面にぶつかった感覚がないことに驚き目を開ける。

「いい加減にしてくれ」

左側にスマレ、右側にシロを抱き抱えて、クロが呆れ顔で二人をにらんだ。

「あ、ありがとうございます」

あつという間の出来事にも瞬時にピンチを救うクロに驚きながら、すぐにスマレは立ち上がった。

「おい」

まだ、クロに抱えられたシロがスマレを呼び止める。

「いま、瞳の色が変わらなかったぞ。ピンチを誘発したはずなのに何故だ？」

「誘発？」

「マントが絡んだだろう」

シロはなぜか得意気になっている。

「シロ様…」

そこまでして、スマレの瞳を観察したいようだ。

朝もやのなか、ロマンチックな感情を抱いた自分を悔やみながら、この人はこういう人だ。と自分に言い聞かせる。

そして、こちらを見つめる二人を置いて、城に向かって歩き出した。

「もう、仕事に戻ります」

シロと言う一国の王子を魅了させるスミレの瞳。

このせいでスミレの人生は善くも悪くも、展開を迎えることとなる。そして、シロ王子に振り回される事となったのだ。

出会いの物語まで遡る。

第1章 いつかの物語（後書き）

あれ？

本編じゃないの？と思われた方、いるかと思っています…

すいません、小説構成上、こちらに短編風に飛び込ませてもらってます！！

本編中の『いつか』の話です。

こちらで雰囲気をつかんでいただきたいと思い書きました。

第1章 世界観として（前書き）

シロクロ世界観のみを掲載しました。

バラバラにした方が読み返しやすいくないと、
、
、
（

第1章 世界観として

この世界は、三つの層に分断されている。

上層部には神々が蔽かに暮らす『天上界』。

中間部には圧倒的な支配力を持つ『人間界』。

最下層部には死の世界と恐れられる『地下世界』。

それらは天上から地下までに根を張る『世界大樹』により繋がっている。

そして、それぞれがそれぞれと関わり合いを持ちながら成立していた。

人間界にはまた、大小様々な国があり、この物語の舞台となるウエンドブル国は世界大樹の根を抱える国として、特異な繁栄を遂げてきた。

その国の王ウエンドブル17世は、息子のシロウエンドブル18世にこの地の治安維持を任せている。

地下世界の混沌から生まれる悪魔や妖魔、人間によるあらゆる問題、天上界から追放された『落神』の暴走。それらを解決し、この国を護る事。

たかが王子にそんな重責を負わせてもどうにもならない。そう考えていた国民はシロの行動力に驚き、感銘を受ける。

国を護るために、国内のあらゆる場所に巡察官を配置し、国内至る

ところに地下シェルターを構築。

魔方陣による建築物の保護、魔導師の育成など…

齡、17の青年とは思えない働きを見せている。

そして、城内には国の守護部隊として『純正団』を結成。

『純正団』は人間離れた特別な力を持つ戦士、魔導師、そして、人間という枠を越えた神の域にいるものたちで成立している。

シロが自ら集めてきた『純正団』の圧倒的な力によりこの国の治安は改善されてきた。

ここまでの説明では、優秀な王子の華麗なる活躍の話になってしま
うわけだが、
そうではない。

この物語は、シロ王子とその周りの特異的な人々、そして、そんな
王子と出会い振り回されてしまうことになる一人の少女、それらが
共に綴る物語である。

第1章 世界観として（後書き）

本編に付属の世界観でした。

ベースは北欧神話。

内容も若干そちらよりになっていきます!!

ここまでの長い長い前置きお付き合いいただいた方ほんとにお待たせしました…ここからです!!

第1章 少女の瞳（前書き）

やっとやっと本編スタートです（＾―＾ゞ

長い目で見てください方…これからもうろしくお願い致しますm
（――）m

第1章 少女の瞳

ウェンダブルの真つ青な空に、朝から何発もの空砲花火が、空を割る勢いで打ち上げられている。

街は国王の生誕記念で賑わっていた。

城内では何百という召し使いがこれから行われる、生誕祭の支度で忙しく動き回っている。

王はそれを玉座から眺めながら、静かに喋りだした。

「シロよ。世は、この年になってもこの国と共にあることを嬉しく思うぞ」

王の傍らでシロと呼ばれた若い青年はゆっくりと口を開く。

「父上。この国が父上と共にいつまでも健全であることを願っております」

シロは白髪に青い瞳を持ち真つ白なマントを纏いながら、その整った顔立ちで柔和に微笑んだ。

「うむ。お前が『純正団』を率いて護っているからこそ、治安が安定している。お陰で、こちらでも安心して政治に力を入れられるのだ。これからも、このウェンダブルを頼むぞ」

「お認め頂き光栄です」

そういつて、またにこやかに笑う。

そして、王に一礼すると立ち上がり、その場を去った。

城内の廊下をマントをなびかせながら歩く。

その姿は、シロの王子としての品格を表すように優雅だった。
シロの後ろには、二人の従者が揃って付いてくる。

「オリーブ、この後の予定は？」

オリーブと言うシロよりも幾分年上で全身から大人の色気を醸し出す女が、ツカツカとヒールを鳴らしながら、手元の手帳を開く。

「王子はこの後、大臣方との謁見と会場の視察となっております」
オリーブは自慢の妖艶な体を揺らしながら淡々と告げる。

「そうか、ペリドッド。クロを呼んでこい」

「かしこまりました」

もう一人の男の従者、ペリドッドは、執事服をビシッと着こなし眼鏡を光らせるとシロに背を向け、走り去っていった。

するとシロは今度は誰もいないはずの廊下に向かい声を掛けた。

「アイリス、居るか？」

「は。こちらに」

いつの間にか、黒服に身を包んだ女が、廊下の端に膝をつき頭を下げている。

突然の出現にも、シロは全く動じることはなかった。

そのまま歩みを止めず前に進む。

黒服のアイリスは音も立てずに、シロの後ろに付き従った。

「街の状況は？」

「民衆は異常ありません。ただ、例の噂は未だに…」

シロは歩みを緩める。

そして、立ち止まると後ろに控える二人の女に背を向けながら視線だけを送った。

「父上の生誕祭に何かあつては困る。『純正団』を動員し、隠密に事を沈めるのだ」

「御意に」

アイリスの姿はすでにそこにはなかった。

「何だか賑わつてゐるなあ」

荷馬車から顔をだし、左右で二つに結んだ柔らかい髪を揺らしながら、少女は街に目をやる。

その少女と数名の異国を渡る者達を乗せた荷馬車はウェンダブルの巨大な門の前に来ていた。

「さ、いくよ」

一番年配の女が、通行の許可を得ると、馬車は動き出す。

「ちょっと待つて」

少女は慌てて頭をしまった。

ガタガタと大きな音を立てながら、馬車は街の中を走る。

「さすがに王様の生誕祭は盛り上がるものだね……」

仲間たちが興奮しながら話す。

「我々の躍りがその式典の催しとして、披露できるなんてこんな名誉なことないわね！」

「き、緊張する」

少女は胸に手を当て呼吸を整えた。

少女の名前はスミレ。

ウエンドブルからは遠く離れた土地で生まれたが、幼いときに両親を失い天涯孤独となった。

偶然巡業中のミモザを団長とする舞踏団に引き取られ、共に各地を渡り歩いている。

一行は街の大通りをまっすぐ進む。

沢山の店が立ち並び、行き交う人々は皆、清々しい表情で楽しそうに歩いている。

この国はとてもいい国なんだと実感した。

しばらく行くと先に橋が見える。

橋を越えたところにやっと、この国の中心にそびえ立つ城が見えてきた。

「痛いっ」

スミレの左目が突然痛みを感じた。

「どれ？あら、色が変わってるわ」

女将のミモザが瞳を覗き込む。

スミレの左目は産まれたときから突然金色に輝き出すことがあった。

瞳孔には文字が刻まれている。

金色に変わるときには痛みを伴うこともあった。

スミレの悩みの種であり、この体質を疎まれたこともある。

しかし、舞踏団のメンバーはそんなこと気にはせず、仲間として受け入れてくれた。

スミレにとって居心地のいい場所なのだ。

橋を渡りきり、巨大な城門を越えてもまだ、城までは長い道が続く。

小高くなると城下町が見下ろすことができ、そのさらに先には『世界大樹』の立派な根が見えた。

途中、湖や森を通過し、随分と高いところまで登ってきた。
やっと馬車は城内へ入り、動きを止める。

馬車の窓からは制服に身を包んだ召し使いたちがあちこちに見えた。

そして、ここまでの間にスミレの瞳の痛みは消えていた。

荷物を下ろし、皆で分担して城内の控え室まで運ぶ。

「そんなに持って……」

瞳の事もあり、異端者として、軽蔑されないようにと、スミレは顔の高さまで荷物の衣装を積み、持ち上げた。

「足音についていけば大丈夫！」

城の中の大理石の床はいい音をたてる。

だが、音が多すぎる。

世話しなく動き回る召し使いたちの靴音と、前を歩く団員の足音の聞き分けがつかない。

「どうしよう……」

とりあえず、状況を確認するため埋まった顔をどうにかしようと思いを動かすが、一緒に体もふらふらと動いてしまう。

やがて、前方から、一定のリズムの足音が近づいてきた。

スミレの前でその音は止まる。

団員が手助けにきたのだと安心したスミレは懸命に顔を動かし脇か

ら前を確認した。

「！」

目の前には見たことのないきれいな顔立ちの青年が、眉間にシワを寄せスマレを睨んでいる。

白い髪に青い瞳。真っ白な高価な服。長いマント。

しばらく二人は言葉を発することなく見つめあった。

「お前……」

青年のまっすぐな眼はスマレの瞳を凝視している。

「シロ様？」

今度はスマレの後方から、声が聞こえてきた。

その声に青年は我に返ったかのように近づけていた顔を離す。

そして、腰に手を当て、偉そうに胸を張り、スマレを指差した。

「クロ、こんなやつうちにいたか？」

スマレの後ろにいるクロと呼ばれた声の主に訊ねる。

「さあ、祭典の演者ではないでしょうか？」

クロはスマレの顔を覗き込む。

こちらは黒い髪に赤い瞳。シロとは違い、大人びた美形の青年だが、着ている服は昔スマレたちが訪れたことのある『和の国』の着物というものであった。

腰には刀を差している。

二人の男に囲まれてしまい、余計に身動きがとれなくなる。

厄介なことにはなりたくない、逃げるように一步を踏み出した。

「わっ！！」

慣れない大理石に足を滑らせ大量の衣装は宙を舞い、スミレは床に尻餅をついてしまった。

「いたたたっ」

腰をさすりながら見上げると、腹を抱えながらクロを指差し上品に笑うシロと、頭に花が沢山付いた衣装の帽子を乗っけているクロ。クロは目を見開いたまま、止まっている。

スミレの転倒の拍子に乗ってしまったらしい。

「すっ、すいませんでした！」

全く言葉を発しないクロが瞬時に脇に差しである刀に手を伸ばした。

感じたことのない冷たい空気が一瞬にして辺りに広まる。

スミレはその威圧的な「気」の重さに恐怖を感じ、立ち上がる事ができない。

「…クロ」

シロが一声かけると、クロの周りに浮かんだ、殺気と呼ばれるであろう空気が鎮まった。

「悪かったね。躑がなくなってなくて。しかし、面白いものを見せてもらったよ」

シロはそう言ってスミレに手を差し出した。

その手の向こうがわでシロは優しく微笑む。

何て気品に満ちた笑顔なのかと、スミレは見とれてしまった。

シロの手を取りゆつくりとスミレは立ち上がった。

雰囲気から察しは付いたがその手はあまり体温を感じさせない。

スミレが立ち上がり改めてシロを見ると、シロのその表情は一変した。

「金色の瞳？この瞳孔に刻まれた文字といい、君は一体…」

どうやら、ある種の危機を感じるとその瞳は輝く様だ。

クロの殺気で輝いたスミレの瞳をシロはじっと見つめる。

「シロ様、そろそろ行きませんと…」

止まっていた時間をクロが引き戻した。

諦めたシロは床に散らばった衣装を見下ろし、顔を上げ辺りを見回す。

「あ、アヤメ君。これ、一緒に運んでやってくれ」

偶然近くにいた、メイド服に眼鏡で、長髪の少女に声をかけた。

「かしこまりました」

アヤメは一礼すると、すぐに衣装を集め、スミレを見る。

「こちらです」

そう言うなり、衣装を持ち上げささと歩き出してしまうアヤメを慌てて追いかける。

スミレは急に立ち止まると、振り返り、シロとクロに頭を下げ、また二人に背を向けた。

その後ろからシロが
「演技、楽しみにしてるよ。転ばないようにね」
と、声をかけた。

第1章 少女の瞳（後書き）

いきなり、三人が出会いました。

振り回されるスマレを見守ってください！

第1章 スミレ、踊る（前書き）

スミレいきなり巻き込まれます…

さあ大変（＾|＾ヅ

第1章 スミレ、踊る

城の大広間には、名だたる国の王族や関係者、この国の重鎮たちがウェンダブル王の生誕記念式典を祝うために集まっていた。

見目豊かな装飾で彩られた何脚もの長卓には、豪華な食事が置かれ招待客はそれらを口に運びながら、和やかな雰囲気の中、式典の催し物を観賞する。

そのために設置された舞台の裏では、出番を待つ様々な国から招かれた芸人たちが、張り詰めた空気の中で準備をしていた。

その中で、舞台衣裳に身を包み、髪を下ろして化粧を済ませたスミレが落ち着かない様子でうろろしている。順番が近づき舞台袖から王の様子を覗いた。

穏やかな顔をして楽しそうである。その隣の椅子は空席だった。

「どうやら、王子様はいないようだね」
いつの間にかミモザがスミレの脇に居た。

「かなりの美形だと聞いていたのに残念だわ」
美形と聞いて、スミレは先程の二人の青年を思い出した。

「そう言えば、楽しみにしてるって言ってたけど、関係者なのかな？」
広間内を見渡してもその姿は見当たらない。

スミレの手に残る、ひんやりと冷たいあの青年の手の感触が、緊張をほぐしてくれる。

スミレたちの前の演者が、見たことのない楽器を抱え、拍手を浴びてこちらに帰ってきた。

「さて！あたしらの番だよ！いつも通り会場を虜にしてやろうじゃないか！！」

ミモザがそう言ってスミレの背中を叩く。

気合いが入った。

広間に曲が流れる。

スミレは緊張を忘れ、軽やかな足取りで舞台へ上がった。

無我夢中で体を動かし、ステップを踏む。

いつもより、調子がいい。

ふと、王に目をやると、うつとりとした瞳で踊りに見入っている。

その隣の空席に目を写すと、そこにはいつの間にか誰かが座っていた。

じつとこちらを見つめる真剣な眼差し。

そしてその人物にスミレは自分の目を疑った。

そこに居たのは、先程の白髪の青年だったのだ。

「うそでしょ……」

驚きに一瞬足が止まりかける。

その時、誰かにぶつかり体が傾いた。

足を前に出し踏ん張ろうとする。

が、そこには足場がない。

スマレの姿が舞台から消えた。

ざわめく場内。

だが、舞台から落ちたスマレはきちんと着地し、失敗は許されないと、懸命に踊り続けていた。

気が付くと他の仲間たちもスマレのそばに降りてきて一緒に踊っている。

会場と一体になり、曲が終わると盛大な拍手が送られていた。ならんで深くお辞儀をする。

顔をあげ、先程の青年の方を見るが、その姿はすでになくなっていた。

「かんぱーい」

お酒の入ったグラスが高く掲げられ踊り子達はその中身を一気に飲み干した。

スマレはお酒が飲めないのでジュースを飲む。

無事に成功に終わり、荷物をまとめて城下町におり、打ち上げが始

まっただ。

「全く！この子には驚かされたわ」

機嫌のいいミモザがスミレの頭をぐしゃぐしゃと撫で回す。

「ごめんなさい…」

「まあ、いいじゃない！おかげで盛り上がったんだし」
仲間の一人がフォローした。

「それにしても、見た！？」

「何を？」

「王子様よ！」

「え？」

「私たちの舞台にだけ現れてたのよ！！」

「ええーうそっ！」

スミレは人一倍驚愕の声をあげてしまう。
皆の視線が痛い。

「そんなに驚かなくても…」

恥ずかしくなりうつ向くスミレ。

「しかし、噂通りのいい男だったあ」

その後、王子の話題で全員が盛り上がった。

そして、時間は絶ち、素面のスミレに財布を渡したミモザ達はほろ酔いの足取りで店を出ていつてしまう。

今日は街の中の宿に泊まることになっていたが、スミレは宿の場所を知らなかった。

はぐれては不味いと慌てて勘定をしにいくが、こんなときに限り、なかなか店員が捕まらない。

やっと勘定を済まして店を出たが、すでに皆の姿はどこにもなかった。

「どうしよう」

取り合えず街の中を探し回るが夜も更け人の気配もあまりない。気が付くと、さらにシンと静まり返る真っ暗な路地に出ていた。

元の道に戻ろうと、後ろを振り向こうとした瞬間、何かの存在をその背中に感じる。

辺りに立ち込める異様な空気に足がすくむ。

スマレの瞳が急に痛みだした。

「こんなときに…」

目を押さえながら何とか歩き出したとき、肩を捕まれた。

そつと肩に置かれたその手を見る。

命を感じない真っ白な長い指に鋭利な爪が光る。

もう歩くことができなかった。

意を決して振り向く。

「！」

目の前には青白い顔が闇に照らされボウツと浮かび上がり、開かれた口の中には鋭く尖る牙。

それがスミレに迫った瞬間だった。

スミレの瞳が今までにないくらい激しい光を発する。

その光に怯み後退していく。

その隙に逃げようとしたが、恐怖で体が動かない。

やがて光が治まる。

また、闇が訪れると、その生き物はスミレの方へ歩いてきた。

もうダメだと思って目をつぶる。

「そこまでだ」

どこかで聞いたことのある声がした。

目を開け声のした方を見る。

闇に浮かぶ月を背にして立つ人影。

腕に携えていた刀が煌めく。

一歩踏み出すとその刀を振りかざし、スミレを襲った生物に斬りかかった。

たった一撃。

しかし、その生物は叫び声と共に黒い粉となり蒸発してしまった。

「助かったの？」

スミレは何が起こったのか全く理解できず、どっと血の気が引いて、

その場に座り込んでしまった。

「女、無事か？」

スミレを救った人物が手を差し出した。

先程のシロとは違い、温かい手だった。

その手に引き上げられ立ち上がる。

その顔を確認したとき、スミレは驚きで声が出なくなった。

「君は…」

それは城でスミレが帽子を被せてしまった、クロと呼ばれた和装の青年だったのだ。

第1章 スミレ、踊る（後書き）

さて、スミレを襲ったものは…クロって何者？

そんな感じでまだまだ続きます…

ありがとうございました！

第1章 二面王子（前書き）

間空いちゃいましたすいませんm（――）m

第1章 二面王子

「顔を挙げよ」

スマレが顔をあげるとそこには全身清楚な真つ白い服に身を包んだ王子が立っていた。

「また、会ったな」

きれいな顔が柔らかく微笑む。

その笑顔は、初めて出会ったあの時より大人っぽい印象があった。

「王子様だったんですね」

「こら、スマレ！何て口を利くんだい！！申し訳ございません」
隣に並んでいるミモザがスマレの頭をつかんで下げる。

「気にするな。紹介が遅れたようだな、我が名はシロ＝ウエンドブル18世。この国の継承者だ」

シロは気を遣うように二人に優しく言う。

「女将、相談があるのだが」

「はい、何でございますか？」

「その、スマレとやらをしばらく城にて預からせてはもらえないだろうか？」

「えっ？」

スマレはシロを見上げたが、シロは先程と変わらない笑顔を向ける

だけだった。

昨晚、牙を持つ正体のわからない生き物に襲われたスミレは、それを救ったクロに案内され、ひとまずミモザたちと合流することができた。

そして、朝早くまた、クロが宿に現れスミレはミモザと共に城に連れてこられたのだ。

「しかし、王子様…」

困った表情を浮かべるミモザにシロはさらに言葉を続けた。

「昨晚、この少女は何者かに襲われた。うちの者が救わなければ、命はなかっただろう。我々、国の治安維持部隊『純正団』が今、追っている事件の重要な目撃者なのだ。同じことが起こらないように協力してもらいたい」

「ですが…」

「事が終われば解放もできよう。それに…」

シロがスミレの前に歩み寄り、目の前で膝をつく。

そのままスミレのあごを優しく引き上げた。

突然の事に、スミレは身動きとれずシロと見つめ合う。

「この瞳の謎…我が国ならば解明することができるかもしれぬ」
シロは慈しみの表情でスミレとミモザに視線を投げ掛ける。

瞳の謎…

そう聞いて、スミレの気持ちが揺れ動いた。

「わかりました…暫し、お預けいたします。ですがその子は我々の大切な家族ゆえ、危険の無いよう預かっていただけますか？」

ミモザはシロの対応は信頼に値すると感じ、また、スミレの気持ちを代弁するように告げた。

「約束しよう」

変化はないが、それでも優しくシロは二人に笑いかけた。

一国の王子としては腰が低く、身近で、皆に好かれるできた人間。スミレも、この王子の近くにいれるのなら、悪いようにはならないと安心できた。

「必ず迎えに来るからね」

そう言い残し、ミモザたちは次の国へと馬車を走らせた。

「みんな…」

しばらくの別れとわかっていてもなぜか寂しくなりスミレは瞳に涙を溜めた。

「淋しいか？」

共に見送りに来ていたクロが表情もなくスミレに訊ねる。

「ずっと一緒にいた家族だから、一人になると淋しいです」

「家族…」

それ以上は会話もなく、二人は城内へと向かった。前を歩くクロの背中がどこことなく寂しく感じられた。

「これに着替えるようにと」

クロに差し出されたのはこの召し使いが着ている制服だった。

「他のものには怪しまれないように、ここに留まるにはこの方がいいだろうと、シロ様が仰っていた」

スマレは、黙って服を受け取るとクロを見上げた。

表情は変わらず、何を考えているのかわからない不思議な雰囲気を持った人だとは思うが、悪い人ではないとも思える。

「何かあったら言ってくれ。ここでの事はあのアヤメに任せてあるから、会うといい」

「は、はい！」

スマレは、クロに軽くお辞儀をすると記憶に新しい、昨日廊下で衣装を運ぶのを手伝ってくれたアヤメと言うメイドの元に向かった。

スマレは、着なれない制服を着ると、アヤメと合流した。
これから、何が起るのか不安が募る。

「しばらくの間、よろしくね」

だが、アヤメの笑顔にスマレの不安は打ち消された。

「はい、お願いします」

スマレは、差し出された手を握ると、頭を下げる。

「ここでは特に厳しい規律はないのよ。王様方のために心を込めて支えるだけ。暫くは、私と一緒に……」

話の途中で、何かに気づいたアヤメは急に深いお辞儀をした。

┐
?
└

何が起ったのかすぐに理解できないスミレのすぐ後ろに人の気配がした。

次の瞬間、高貴な花の香りがスミレのすぐ横に漂う。

「やあ」

スミレの耳元に顔が近づき、そこで囁かれる。

首筋に息がかかり全身に鳥肌がたった。

そして、すぐに耳まで真っ赤になる。

熱くなった耳を押さえスミレは、後ろを振り向いた。

そこには国の王子である、シロが立っていた。

その後ろには見たことのない羨ましい体型の美女と眼鏡を光らせ姿勢よくたつ青年の二人がスマレを興味深そうに見ている。

スミレの首筋にはシロの息の感触がまだ残り、いい匂いが消えない。

硬直し、後ずさむスミレを見て、シロは口元だけで笑いその瞳を覗き込んだ。

「なんだ、光らないか」

「…な、何をするんですかつ！」

「そうか？これでは足りないのか？」

「は？」

シロはスマレが今まで見たことのない意地悪な笑みを浮かべると、突然スマレの肩を捕まえ後ろの壁に押し付けた。

「ちよっ！！」

シロの顔が近づいてくる。

スマレはあっという間のことで抵抗できない。

もう少しでお互いの唇が触れる。

その時、シロはいきなり顔を下げ、肩を小刻みに震わせた。

「あははははっ！うん、実に面白い」

シロはスマレから手を離し大声で笑いながら、そのまま従者二人を引き連れて、去って行ってしまった。

スマレの持つ、シロのすべてのイメージが音をたてて崩れ去った。

「王子、いたいけな少女をいじめて楽しむのはお止めください。王族の名が汚れます」

オリーブが静かにたしなめた。

「…」

しかし、シロの表情は先ほどまでのものとは一変し、何かを考え込んでいる。

「まあまあ、オリーブさん、王子は悪気ばかりであの娘に近づいたのではないですよ。あの瞳の刻印見ましたか？」

「クロが、あの瞳から計り知れない光が溢れ、『吸血鬼』を後退させたと言っていたが…」

「確かに、異質なものであるような気はしますね…」

しばらく三人は無言になりそのまま歩いていく。

「オリーブ、ペリドッド」

「はい」

「あの娘から目を放すなよ。同時に瞳について調べてくれ」

「わかりました」

「神の類いの力を秘めているかもしれん」

「仰せのままに」

シロの眼差しは天井に向けられる。

「生まれながらに神の力を持つもの…か…」

広い部屋の高い天井に描かれた神々の壁画を見つめると、何かを思うようにシロはその目を閉じた。

第1章 二面王子（後書き）

さあ、スミレさん巻き込まれて行きなさい（^^ゞ

第1章 空しき背中（前書き）

城のメイドとして働き始めたスミレ。なにやら食堂内が騒ぎ始め…
クロがしゃべります（＾―＾）ノ

第1章 空しき背中

国王生誕祭の夜の出来事から数日がたった。

特になんの進展もなく、ただひたすらメイドとしての役割をこなすスミレ。

「わたし、何してるんだろう…」

休憩中、使用人専用の食堂でパスタをフォークに巻き付けながらスミレはため息をつく。

「解放されるのはいつなんだろうね」

向かいに座って『和の国』の味噌汁をすすりながらアヤメが心配そうに呟く。

スミレの成り行きを知っているのはアヤメだけである。

アヤメは面倒見が良くお陰でスミレも仕事をしつかりとこなすようになっていた。まだ何日かの付き合いなのに、アヤメはスミレにとって姉のような存在となっている。

答えのない問題は後回しにして、食事を再開していると食堂内がざわついた。

「クロ様が…」

「…怪我」

「やはりあの噂は…」

「吸血鬼…」

断片的にあちこちから聴こえてくる会話。

一斉にたくさんの使用人たちが話を始める。

「何かあったようね…訊いてくるわ」

アヤメは仲間のもとへ情報を集めに行った。

そしてすぐに顔色を変えて戻ってくる。

「クロ様が吸血鬼から女性を庇って大ケガをされたそうよ!」

「えっ?クロさんが?」

あの晩の奇妙な生き物の鋭く尖る爪や牙、青白い皮膚。何よりも人ではない何かの、あの異様な雰囲気は忘れたくても脳裏に焼き付いて離れない。

思い出すだけで背筋がゾツとする。

民衆はそれを『吸血鬼』と呼んで恐れている。

最近、街では吸血鬼に女性が襲われる事件が起こっていた。

人々はその噂と、その存在に怯えながら暮らしているのだ。

そして、そんな輩にも怯むことなく斬りかかり、スミレを救い、手を差し伸べてくれたクロが怪我をした。

これだけの騒ぎが起こるほどだ。

もしかしたら…

後先考えず、スミレは食器を片付け、アヤメからクロの部屋を聞き出すと、走り出した。

「まだ、あのお礼言っていない!」

何日間かでの城内の事は大分わかったが、行動範囲以外は未知の

場所。

迷いながらも、なんとか、城の中間にある中庭に出る。王子直属の護衛であるクロはその中庭に面した部屋を与えられていた。

その部屋は重たそうな扉で閉ざされている。

だが確かに中には人の気配があった。

スマレが扉の前でうろろと開けようかどうか迷っていると、中から声が聴こえてきた。

「痛い…もつと優しく出来ないのか？」

クロの声だった。

その様子から、どうやら無事のようにスマレは安心する。

「こういうのはしっかり縛らないと悪化してしまいます!!ね、先生？」

「そうですね…指先まで紫になってますよ…」

クロの他には男女二人の声。

「…私なんかのために…」

中の女がそう呟くと、しばらく部屋中が静まり返った。どうやら、この声の女を庇って怪我をしたようだ。

そして、急にその扉が開いた。

「あらっ？」

スミレは突然の出来事に直立してしまう。

扉の隙間から、女が顔を出した。

長いまつすぐに伸びた髪を真上に一つに束ね、意思の強そうな大人びた大きな瞳。スミレよりかはいくつか年上であろう。

「あ、あの…」

スミレが何も言えないでいると、その女はしばらく考え、クロに向かって声をかけた。

「クロさん、可愛いお客様がお見えですよ！」

「…誰だ」

奥から声がした。

女がまたスミレの方を見る。

「あら？あなた瞳に何か…」

その言葉を聞いたクロは締め付けられていた包帯をほどく手を止め、扉の方を向いた。

「スミレか？」

「はい…」

「入れ」

そのあつけないやり取りに女は目を細めた。

「私のときはあんなに部屋に入れるのを渋っていたのに…あなたは、一体…」

少し口調に元気がなくなり、スミレを見つめる。

「さくらさんは王子の級友でしたから、クロさんは気を使っていたのですよ」

もう一人の男がニコニコしながら扉をさらに開いた。

「スミレさん、でしたか？そんなところにはいないでお入りください」
長身で、黄緑色の流れる髪。優しい笑顔に白衣を着ている男がスミレを中に招いた。

「初めまして。城医のトパーズと申します。こちらは王子の魔導学校時代の級友で王子を抜き首席で卒業されたさくらさんです」

トパーズはさくらの機嫌を取るようににこやかに自己紹介をした。

「王子さまは魔導学校にいかれていたんですか……」
意外な話を聞いた気がした。

なんだかすごい人たちに囲まれて小さくなっていたスミレがやっと口を開いた。

「私は、こちらにしばらくお世話になってます、スミレと申します！」

元気良く頭を下げるスミレ。

「……お世話に？……ですが、ここの制服を着ていますが……」

「あの、えっと……」

「先生、紹介はもういい」

三人のやり取りにクロが口を挟んだ。

スミレの件はそれだけ知られてはいけないことなのだろう。

クロの様子を察したのか、トパーズはさくらを連れ王子に報告をし

に行くと言って、部屋を出ていってしまっ。

包帯を巻き付けてあるとは言っても、上半身の肌を露にしているクロと二人きりになってしまった。

スミレは目のやり場に困る。

「あのっ！」

「お前……」

同時に口を開いてしまっ。

「お先にどうぞ」

スミレが肩をすぼめて話を譲った。

「……いや。何か困る事があったのか？」

「え？」

一番最初にクロと会ったときのあの雰囲気か嘘のように穏やかな空気をもつクロに、スミレの緊張は溶ける。

「何でもないんです！ だけど、あの、クロさん、夜の街で私を助けてくれてありがとうございます！ それだけ言いに来たんです」

クロは思わぬスミレの言葉に戸惑う。

「お前は、それだけを言いに来たのか？」

表情のなかったクロの口許が少し緩んだ。

「律儀なやつだ」

「クロさん、怪我、大丈夫なんですか？」

包帯が大袈裟なのか、かなりひどい怪我のようだが、そんなこと思わせないクロの様子。

「ああ、俺は人より治癒能力が高く、切り傷くらいならすぐ治るかな」

「…でも、もう無茶しないでください」
スミレはうつむき告げる。

「心配してくれたのか…だが俺は、シロ様に命を預けた身。シロ様のためなら無茶でも何でもするつもりだ」
「…そんな…」

部屋の中が重たい空気になった。

「そんなこと言わないでください…」
小さい声でスミレが呟く。

その声が届いたのかはわからない。

「俺には記憶がない…だから、そうするしかないんだ。シロ様を護ることだけ…それだけでも俺には生きる意味がある…」
その言葉にスミレは顔をあげクロを見た。
だがもうクロはそれ以上話さなかった。
スミレも何も聞くことが出来ない。

窓から差し込む日差しにクロが照らされる。

理由はわからないが、なぜかそのシルエットは痛々しく傷だらけに見えた。

同時に、クロの背中がとても哀しく、空しいものにも見えた。

「先生…」

シロの部屋へと向かう廊下でさくらはトパーズを引き留める。

「クロさんはなぜ、シロ君にだけあんなに従うんですか？あの女の子はシロ君と関係があるんですよね？だから簡単に部屋に入れた…」

さくらはうつむき呟いた。

トパーズはそんなさくらに笑顔を向ける。

「さくらさんはひとつ間違ってますよ」

その言葉にさくらは顔をあげた。

「王子に従うだけじゃないですよ。現にあなたが無茶をして吸血鬼に立ち向かっているときいて、真っ先にあなたの元に向かったのはクロ君ですから…」

「えっ？」

「王子の話しもろくに聞かずに。だから怪我をされたのかもしれませんか…」

「…ふふっ…そうなんですか？」

トパーズの話の聞くと、先程までの落ち込みはどこかにいつてしまった様子のさくらは足取り軽く歩き出した。
その後ろ姿を見ながらトパーズは微笑んだ。

「青春…ですね」

第1章 空しき背中（後書き）

はい、以後、クロさんは余計なこと話さなくなりまーす（、（過去に何が！？

すいませんが、そこまで根気よくお付き合いくださいませんか（、（？

ありがとうございます
がんばります！！

第1章 シロ、戸惑う（前書き）

シロとスマイレのやり取りです…
少しだけお近づきになりました。

第1章 シロ、戸惑う

「ふーん」

豪華な装飾であしらわれた椅子の肘掛けに、肘をつき手に顔をのせる。

いかにも退屈でつまらない話を聴いている、そんな態度をとるシロに、さくらは苛立ちを隠せない。

「ちゃんと聞いているの？シロ君！！」

シロはニヤリと笑う。

「ちゃんと聴いてますよ。さくらさんのクロに対する熱い想いは痛いくらいだ」

「はあ！？」

さくらの顔が紅くなる。

本気で、怒ってやろうとシロを睨み付けたとき、シロの表情が真剣なものに変わった。

「…ですが、彼は僕の所有物です。君にどう言われようがアレを扱えるのは僕だけ」

「所有物だなんて…ヒドイ…」

さくらは小さく呟いた。

「彼は主君に忠義を尽くす武士です。その志を無視することこそ、彼を殺すに等しい。あなたならよくわかると思います…」

確かに、さくらの故郷『和の国』では、そう言った侍道という習わしが重んじられている。

うまく丸め込まれていることに気付き、さくらはとりあえず口を閉じた。

「ですが…」

シロは話を続ける。

「主君に背き行動したことは遺憾です。クロにはこの件から離れ、怪我が回復するまでは謹慎と言う休養を与えましょう」

「は？」

この男の真意は全く理解できない。

だが、決して悪いようにはしないと断言することはさくらは解っていた。

「素直じゃない」

反抗するように小さく呟くと、シロに向かって軽く微笑み、スカートの裾を引き上げ会釈した。

用件は済んだ。早くこの場から離れようとシロに背を向けたとき…

「ああ…それから、さくらさん…」

去ろうとするさくらをシロは引き留めた。

「はあ……」

心ここにはないスマレは、ため息をつきながら窓を拭いていた。
クロの台詞が何度も頭の中で流れ、あの哀しい背中が忘れられない。

「どうした？」

「いえ、クロさんの役に立てないかなと思ひまして……」
そう呟いた瞬間、スマレの手が止まる。

おかしい間が空いた。

スマレの後ろから、あの、いい香りがしている。

「王子様……！」

即座に距離をとった。

あの時のように何かされるのではないかと不安がよぎる。
だが、今日は様子が違った。

いつもは必ず誰かがそばにいるのだが、珍しく一人。
そして、口をへの字に結び不機嫌な顔をしている。

「どうして皆、クロのことばかりなんだ！」

腕を組みスマレを睨み付けるシロ。

スマレは蛇ににらまれた蛙のように小さくなってしまふ。
その状態のまましばらく時間が流れると、シロが急に口を開く。

「いま、クロの役に立ちたいと言ったな」

「……はい……」

シロがスマレを手招きし、スマレはシロの側に警戒しながら寄る。
シロは声を小さくして話し出した。

「あいつは今、お前が関わる吸血鬼騒動を追っているんだが、お前が手を貸してくれたら、解決するかもしれん」

「私ですか？」

きつと不安になり、困った顔をするだろう。
シロのいたずら心だった。

しかし、スマレの返事は意外なものであった。

「わかりました！クロさんには恩がありますから！」

「お前…」

まさかの返答にシロは一瞬言葉を失うが、一言だけ口からこぼれた。

「義理堅いやつだな…」

「よく言われます」

スマレはクロに喜んでもらえる、と気合いの表情を浮かべた。
そして、シロと目があつたのでとりあえず、微笑む。

「…」

気づくとシロはあつけにとられたように目を見開いていた。

「あの… なにか？」

「な、何でもない！」

そう言っと、シロは反対側を向いてしまう。
しかし、その頬が少しだけ赤みがかっていた。

「王子様？私は何をすればよいのですか？」

シロのちょっとした変化など気づきもしないスマレはキラキラした
眼差しでシロを見上げた。

「ま、まずは、俺の事はシロ様と呼べ！！王子は要らない！！いいな
？」

「へ？」

「返事！」

「あっはい！シロ王子！」

「違う…！」

「えっと、シロ…様」

「よし、では解散だ！！！」

「あ、はいっ！」

完全に話をはぐらかし、シロはふいと後ろを向いて歩いていった。

「命に関わることだ…やはりあいつには頼めん…！」

小さく独り言を呟き、同時にため息をひとつついたときだった。

「うっ…！」

白くなびくマントが後ろから強く引つ張られた。
その勢いで首は絞まり、後ろに倒れそうになる。
なにかに挟まったかと振り向いた。

「待つてくださーい！」

スマレが懸命にマントを引き寄せている。

「貴様っ！」

怒りマークを額に浮かべシロはマントを引っ張り返す。

「まだ、話が途中ですー！」

お互いが眉をつり上げ睨み合う。

「私にそんな話しといて逃げるんですか!？」

「何だと?!」

「小さなことでもいいんですー!役に立ちたいんですー！」

スマレの勢いが勝ったのか、シロは諦め両手を挙げた。

「…わかった、もう睨むな。放せ。それでも一国の王子だぞ」

「あっ!すみません！」

我に返ったスマレは慌ててマントを放す。

「危険が伴うのだ。そんなことお前にさせられないと思ったただけだ」

「…それって、私を心配して…？」

「ち、ち、ちがうー!!女将との約束がだなー！」

「シロ様って優しいんですね…誤解してました…」

スマレが申し訳なさそうに微笑むと、また、シロの頬が紅くなる。

「くそっ…お前と話すと調子が狂う…」

目の前にいる一人の青年は、時に国王の息子として紳士的で、時に周りに迷惑をかける意地悪な王子として、そして、国民に対して期待を裏切らない頼れる存在として、いろんな顔を持っている。

今ここにいて、一人の人間の安否を気遣い、それを恥ずかしがるシロは一体どんな存在なのか。

すごく、身近に感じる。

スマレはシロの事がわからなくなり、なんだか少し、知りたくなっていた。

「そう言えば、今日はお一人なんですね？いつもお側にいる方々は？」

スマレは突然話し出した。

「？オリーブとペリドッドか」

シロも普通に会話する。

「とてもお綺麗な方ですね、オリーブさんて」

「…そうか？」

「そうですよ！シロ様とよくお似合いです！」

「は？」

シロが冷たい視線をスマレに送る。

「まあ、あいつの頭の良さはとても頼りにしている」

「頭の良さですか…」

思っていた答えと違い、スマレは意外な顔をする。

「なんだその顔は…」

今度はシロが不満そうな顔をした。

「ふっ…お前とは次元を越えて作りも違うしな」

そう言つて、スマレを上から下まで眺める。

「な、なに見てるんですか！比べないでください！」

「比べるほどでもない…」

ふと、シロの脳裏に生誕祭で踊るスマレの姿がよぎった。

「まあ、あの時のお前は悪くなかった…」

「あの時？」

シロはつい口に出してしまった言葉を後悔し口を閉じた。

「王子様！あの時って？」

「う、うるさい！それに王子と呼ぶなと言ったはずだ！」

「あ、えつと…シロ…様…」

なんだか、この呼び名は、スマレにはまだ馴染まない。

「もついい。お前と余計なお喋りをしているほど暇ではないのだ！

仕事を切り上げて着いてこい」

だが裏腹に、スミレと話すのは嫌ではない。

時間を忘れ立ち止まって話していてもいいかもしれない。

何故なのかシロには全くわからないが、スミレといると気が休まる。

そんな気がした。

スミレはシロに言われるがまま、仕事をすぐに切り上げ片付けを済ますと、窓際で外を見て時間を潰すシロの元に駆け寄る。

そして何も言わないシロの背中を追いかけた。

第1章 シロ、戸惑う（後書き）

シロ様「あんた大変だよ」とグチをこぼしつつ…

次回はもっと大変！新キャラのパレードが始まりますΣ（・＿・）＊

第1章 純正団、集う（前書き）

やっとの更新です。

今回は『純正団』のメンバーが登場します。

第1章 純正団、集う

——まだだ

もつと新鮮で生命のエネルギーに満ち溢れた血液が要る。

若い女の血。

街に放った妖魔は私の元に赤々とした汚れのない血を運んでくる。

従順なる吸血鬼。

三体造ったはすが、二体はこの国の王子の犬に葬られてしまった…

まあ、三号機はそんなに簡単にはやられまい。

あいつは実に優秀だ。

それにしても私の作品を消し去ったあの男…

コチラ側の妖気を放っているようだが…

どちらにせよ、私の望みを邪魔することは許さない。

それも、私の生成している『コレ』の完成によってすべて終わるのだ。

この国も

この世界さえも

…あと一歩

しかし最後の仕掛け…

『神の一部』を手にいれなければ…

一体どうすれば…

そう言えば…1号機を怯ませたあの瞳の力…

よもや…

調べる必要があるそうだ…

冷たい地下の闇の中で人影は両手を天に掲げる。

その目の前に映し出された巨大な装置の中で、人とも妖魔とも違う何かはまだ静かに眠りにについていた。

「シロ王子様？この廊下ってどこに繋がっているんですか？」
スミレの問いには見向きもしない。

そして一度も振り返ることなく、マントを地につかない速度でなびかせ、シロはどんどん歩いていく。

先程までの明るかった廊下とはガラリと雰囲気が変わり異文化の装飾が壁にたくさん掛けられている。

地下に降りたつもりはないのにヒンヤリとした空気が漂う、部外者が簡単に踏み入っていい場所ではないような気がした。

何となく薄気味悪い。

まだまだ道は続いている。

しばらくして、シロが口を開いた。

「はぁ…だから王子をつけるなと言った。何度言ったらわかるんだ？」

「うう…すみません」

「…もうすぐだ。怖いのなら着いてくるな」

そう告げるなりシロは歩く早さを上げた。

「ま、待ってください！」「うぐっ…！」

スマレは懸命に手を伸ばしシロのマントをまた引っ張った。

「貴様ー！！またしても！！これは手綱ではない！」

スマレに向き直り声をあげるシロに、スマレは肩をあげ小さくなり、うつ向いた。

マントを掴みながらその手を震わせる。

「…？おい？」

スマレの様子がおかしい。

シロは黙りこんで下を向くスマレの顔を覗き込んだ。

「一人じゃ怖くて帰れませんっ！！」

ゴスッ

「痛っ！」

急にスマレが顔を上げたので、頭突きがシロの顎に直撃した。

「うう…」

「はっ！シロ様！？…大丈夫ですか…？」

スマレは顎を押さえてうずくまるシロに、なんともなかったかのよう
に声をかけた。

「マジ、許さん！」

シロはすぐに立ち上がると、スマレに背を向けほぼ、小走りのペースで前に進んでいった。

「シロ様あゝ置いてかないでください」

さっさと行ってしまふシロを見失わないようにスマレはその後ろを

走りながらついていく。

「あれ？シロ様、泣いてます？」

シロの目からうつすらと光るものがこぼれた。

「うるさい！！目にゴミが入ったのだ！お前はいちいち……」

「お前じゃありません！スマレです！！」

「お前なんてお前で十分だ！！」

「シロ様こそ！私に呼べと言っておいて、私のこと名前で呼んでくだらないのですね……」

「…ふん、立場を考えろ」

突然、一歩先に行くシロが足を止める。

「きゃっ！」

急に止まったシロの背中にスマレは激突した。

シロのいい香りが広がる。

その背中に埋まった顔をすぐに離し、何故か、紅潮してしまった頬を手で隠した。

「着いたぞ」

暗闇のはずのその部屋の入り口からは美しい光りがたくさん漏れて

いる。

光の量で、相当な広さのある部屋だとわかる。

シロと、ゆっくり中に進む。

一歩踏み込んだとき世界の変貌に息を飲んだ。

漏れていた光よりも遥かに明るく暖かい日差しが、二人を迎える。まさしく大聖堂と言う名に相応しい神秘的な空間。

まるで神の世界へ繋がっているかのような高い天井には、どうやって描かれたのか、神々が戯れ、怒り、戦う様の壁画が彫られている。奥に見える巨大な女神の像の後方からは色鮮やかなステンドグラス。そこから差し込む眩しい日の光は色をつけ床に散りばめられる。

女神の像の下には数名の人影が、こちらを見ながら立っているのが窺えた。

そのどの視線も交わらず、ただ静かにシロとスマレを見つめている。

「シロ殿が取り乱すなど、珍しいな。ここまで響いてきたぞ」
人影のうちの一人が抑揚のない声で告げた。

美しい容貌に刺すような冷たい視線。

神秘的な雰囲気には違和感なく溶け込む金色の短い髪。

その腰元には細く長い剣が携えられていた。

「…取り乱したつもりはない。うるさくして悪かったな。皆、揃っているか？」

「何名かは巡察に向かわせている。我々だけでは足りなかったか？」

「…いや、大丈夫」

シロもまた、前に進む度にこの聖堂の厳かな雰囲気に見合ったものへと変わる。

シロの後ろを離れないようにスミレも人影の方へ歩み寄る。

近寄る度にこの集団の一人一人の放つエネルギーのような物が人のそれとは違う、何か異質な物の様な気がした。
スミレの瞳が放つ何かと似た力を感じる。

「クロはどうした？噂通り怪我がひどいのか？」
人間より一回り以上小さいが、ガッチリとした体型の男がこちらを見ながら話しかけてきた。

「クロの治療能力の高さはご存じかと…」

その小さい男に対して、シロは尊厳のある眼差しを向け静かに応えた。

「で、その子は？まさか新しい仲間！？」
長めの髪を後ろで束ね、きりつとした視線の中に優しさがある笑顔

を向ける男もスマレを見る。

「…この少女は、今回の作戦の協力者だ」

シロはスマレの横に立ちその肩に手を置いた。

「私の調査では吸血鬼はあと一体。つまりそいつをおびき寄せるために協力を仰いだと言うことですか？」

全身を黒い衣装で包み、顔を覆っていたマスクをしたにずらす。

金髪的女にも見劣らない整った顔立ち、体型からもいかにも身軽そうな女は、スマレを観察するかのような目で見ながら告げた。

「…そうだ」

全員が目を見開き、そのまま伏せる。

いくつかのため息が聞こえた。

「貴方はまたさくら殿と同じ過ちを繰り返すつもりか？しかもいまはクロもない」

金髪的女が半ば飽きれ口調で話す。

「さくらさんの件は彼女が勝手に起こしたことです。我々『純正団』はそんな無謀ことはしない」

『純正団』。

聞きなれない言葉、わからない話がどんどん進む。

スミレは訳もわからず、ただ、周りをキョロキョロと見回すだけだった。

「あなた方はこの私が創った『純正団』のメンバー。私がもともと期待と信頼をおく存在です。契約通りこの国を護るために命を懸けて戦ってもらう。そして、私の命令には決して逆らわないと改めて誓って欲しい。クロの二の舞は避けたい」

「クロがあんたに逆らったのか!？」

小さな男は大袈裟に驚きシロに訊ねる。

「いいえ…正しくは話を聞かないで、自分の判断で動いてしまった。まあ、あいつは『純正団』ではなく、私の護衛ですから」

「そうだったな」

金髪の女が口許を引き上げた。

「しかし、鬼斬りはクロくんがいなければできないのでは?」

優しい笑顔そのままに髪を縛る男も訊ねる。

「…誰が、斬る、と?」

「まさか、捕えるつもりか?」

金髪の女が面白いものを見るような目でシロを見つめた。

「残りはあと一体。だが、やつらの黒幕がいるはず。それを掴むのが先では?」

シロは冷静に、淡々と話す。

「しかし…」

黒装束の女は不安そうに眉を潜めた。

「アイリスの調査ではまだまだ正体は掴めない。それならここはひとつ。懷に飛び込んでしまおうではないか！」

「シロ様！それこそ無謀では？こんな小娘ではあつという間に事が終わってしまう…」

アイリスと言う黒服の女はまだ、納得がいかない表情でシロに詰め寄った。

「…大丈夫。この少女には産まれながらの神の加護がある」

「神の加護？」

全員がスマレを見つめ、その全てを凝視する。
スマレは恥ずかしくなって顔を伏せた。

シロがまたスマレの肩に手を乗せる。

「そーいうことだ」

そう言つてスマレに笑顔を向けた。

「私が、囀に！？」

「お前はこの『純正団』が護る。頼まれてくれ」

真剣な眼差しになったシロ。

そして、ここにいるスミレ以外の全員が返事を待っていた。
受ければ必死に護ってくれるだろう。だが、受けなくとも別の方法で探すのではないか？またあの怪物と会うのは避けたい…

いろんな事が頭を巡り、スミレが答えを出せないでいると、金髪の女が少しだけ笑みを浮かべながら話しかけてきた。

「その囹の護衛は、私が引き受けよう。シロ殿が言う神の加護、見ねばなるまい」

「…イキシア。宜しく頼んだ」
シロの声が弾む。

イキシアと呼ばれた、金髪の女はスミレの前に立った。

「私の名はイキシア。『純正団』団長だ。女、名は？」

「あ、えっと、スミレと申します！！」

「スミレ、お前は私が護ると誓おう。私の血に賭けて」

イキシアの力強く、頼もしい眼差しにスミレはただ、その場に立ち尽くした。

第1章 純正団、集う（後書き）

このまま、どんどん進んでいきますように（＾－＾）

今回はシロの

「マジ、許さん」と言う言葉が自分でハマりました。

次回は女だらけのお話です！！

お付き合いいただきありがとうございました！

第1章 作戦、始まる（前書き）

今回は女だらけです。
どうなることやら…

第1章 作戦、始まる

「待ってましたわ」

自分の服に着替えたスミレと合流したイキシアの二人を、クロの部屋で出会ったさくらが城門前で迎えた。

「さくら…さん？」

さくらは少し不機嫌そうにスミレと、その脇にいるイキシアを見る。

「この国の王子直々の命令では仕方ないわ。この任は私が、あなた方の面倒を見ます。イキシアさん宜しいですか？」

ただ静かに話を聞くイキシアをスミレはチラツと見る。

「さくら殿に頼んだか。王子は何を考えている…」

「いつ、一度は失敗しましたが、この街は私が暮らす大切な場所です。『純正団』のお力があれば、二度目の失敗などありません」

興奮気味に話すさくらと対称的にイキシアは至って冷静だった。

「さくら殿の力を甘く見ているわけではない、むしろこちらこそ頼りにしているが…」

そう言うといキシアは黙ってしまう。

スミレと、イキシアは歩き出したさくらの後を黙々と着いていく。

この沈黙に耐えられなくなったスミレが口を開いた。

「あのっ！さくらさんは城下街で暮らしているんですか？」

「ええそうよ。まあ、シロ君の級友というだけで、城への出入りは自由なの。シロ君も優秀だったみたいだけど、私には負い目があるのかなあ」

さくらの機嫌が少しよくなる。

「スゴいですね。私なんて、特技と呼べるものなんてなんにも…まして、戦うなんて…」

スミレは正直、まだ戸惑っていた。

何も役に立たずにただ吸血鬼の餌食になってしまうのではないか。

まして、あんな恐ろしい思いを自らしに行くなんて。

…なぜ断らなかったのか。きっと断る余地はあった。

だが、スミレは自らが囿となることを決めた。

「あなたは、なぜこの件を引き受けたの？」

スミレの心情を察したのか、さくらが立ち止まりスミレに訊ねる。

「…怖くないの？」

「こ、怖いんです。だけど、この瞳の力でなにか役に立てると思うと、

逆に引き受けなければいけない気がしました。そして、何故だが、皆さんのことは信頼できるんです。絶対に大丈夫だって」

スミレは恥ずかしそうにうつむきながら笑った。

イキシアが口を開く。

「人間とはおかしな生き物だ。初めて会い、力も素性もわからぬものを信頼するなどあり得ん」

イキシアの言葉にさくらも続いた。

「力になりたい、それだけで、何も知らない人に命を預けるなんて……」

スミレの考えは理解されないようだ。

二人は揃って首を横に傾ける。

「しかし、我々を信頼する気持ち受け取っておこう。そしてその信頼に応えよう」

イキシアが軽く笑う。

「私たちに任せて！」

さくらもスミレに笑いかけた。

「お願いします!!」

スミレは髪を揺らしながら二人に深く頭を下げた。

しばらく山を下ると街に出る。

舞踏団の皆と荷馬車で通った道。

そして、夜に迷い戦慄の出会いをした路地裏。

たったそれだけなのにこの街の印象は色濃い。

まだ、夕方夕飯の買い物客で賑わう商店街を歩く。

そこかしこで店員達が威勢のいい声で呼び込みをしている。

そして甘くて美味しそうな匂いが漂ってきた。

「着いたわ」

さくらがそのいい匂いのする店を指差す。

看板にはベーカリーと書かれていた。

「これが私の住み込みで働いている……」

「パン屋さんなんですか!？」

直ぐにスマレがさくらに言い寄ってきた。

「そ、そんなにキラキラした目しないでよ……」

スマレの羨望の眼差しにさくらは照れてしまう。

「まさか、この様なところで働いていたとは……」

イキシアが少し意外なものを見たような視線を送る。

「私、大好きなんです!!パン!!あゝなんかさくらさんからは甘い匂いがすると思ってたんですよ!!……」

「…あなた、ホントに変な子ね…」

さくらのスマレを見る表情が変わっていた。

すると店内からどこかで見た女が出てくる。

「やっと来たか」

「アイリス…」

大聖堂の中で出会った『純正団』の一人。

先程は黒服に身を包んでいたが、今は普通の街娘の格好をしている。

「いつの間に…」

スマレが驚きの視線を向けていることに気づいた女はスマレに向かって来た。

「私はアイリス。街と城の様子をシロ様に伝令する役割を担う者」

アイリスの自己紹介を聞き、その風貌についてスマレは納得することができた。

「こんなところで話している暇はない。さくら、部屋を借りている。そちらへ」

アイリスに言われるがまま4人はパン屋二階のさくらの部屋に向かった。

「ちょっと！なによこれ！」

部屋に入るなり、さくらは驚きの声をあげた。

部屋の中が真っ黒のカーテンで覆われ、日差しは入らない。家具は端に片付けられ、中心部に衣装が何点かかけてあるだけとなっていた。

「昼間はまだ日が届く。見つかつては困る。そしてこの衣装は活動用に選んだ隠密の戦闘服だ」

アイリスは少し自慢げに淡々と告げる。

「わあゝスゴいですね」

スミレは暗闇では目立たない服一つ一つを手に取りその出来に感心している。

「私はどれを着ればいいですか？」

黒を基調とした衣装を手取るスミレに、アイリスは近づきそれをまた、掛け直す。

「図が目立たない服を来てどうするのだ？そちらの街娘用の明るい配色のやつを着てくれ。さくらはこれ、イキシアがこれだ」

たくさんかけられた衣装から一つずつ手渡す。

「衣装マニア？」

さくらが小さく呟いたが、アイリスは聞こえないフリをした。

するといきなりスマレが服を脱ぎ始める。

「ちよっちよっと！何してるのよ！！」

さくらがスマレに向かって怒鳴る。

「へ？あつ！すいません…人目なんて気にしたことなかったもので、つい…」

「別に気にはしないけど…一言断ってよね…」
さくらは困ったように眉を下げた。

「なるほど、スマレは無謀ではなく、無頓着なだけだな。シロ殿が乱心するわけだ」

イキシアはスマレを小バカにしたような目を向ける。

「今、ひよつとして、バカにしました？」

スマレは目を細めてイキシアを見た。

「いや、別に。感心しているだけだが」

イキシアはさらっと受け流す。

「どうでもいいが、早く配置と巡回先を決めたいのだが」

アイリスが二人に冷たい視線を向ける。

「どーでもいいですけど、いつの間にこんなセッティングしたんですか！？」

今度は、さくらがアイリスに冷たい眼差しを送った。

部屋の中は沈黙に包まれた。

第1章 作戦、始まる（後書き）

不思議な雰囲気になっちゃいましたが第1章もあと少しです!!

息抜きは終わり。

あとふたつ。第1章ラストまでシリアスパート!

暫しお待ちくださいm(_____)m

第1章 闇の足音（前書き）

一章も終盤戦です!!

シリアスモード突入。

図作戦は決行されますが…

では、どうぞ、ご覧くださいm (_ _) m

第1章 闇の足音

「この衣装には魔力を高める霊符が縫い込んである。あと、スミレのには微力だが、魔力・妖力・物理攻撃に対する結界が張られるので安心するがいい」

夜も更け、とうとう囃作戦が決行されることとなった。

衣装の話は気休めにしかないが、緊張するスミレに気を遣うようにアイリスがスミレから離れる際に教えた。

スミレの表情は相変わらず強張ったままだが、意を決して話し合い通りの道順で歩き出した。

すでに他三人の気配はない。

まるで、たった一人であの夜の恐怖へと戻るようだ。

あんなに賑わっていた街の大通りも、吸血鬼騒ぎのせいか全く人影はない。

すみれの足音だけが街の中に響く。

細い道へ入る。

静寂は道を曲がる度に広がる。

「きっと大丈夫」

自分に言い聞かせながら歩いているが、足が震えている。

あんなことがなければ…

今こうしていることが不思議でならない。

「巡回の人もいるって話だし…」

寂しさを打ち消すように小さく独り言を呟く。

そして、クロに救われた瞬間を思い出した。

「もしかしたら、またクロさんが…」

そういいかけて、首を振る。

身体中に包帯を巻かれたクロの姿が脳裏をかすめた。

あんな体で来れるわけがない。

ひとつ希望が消えた。

段々と歩く速度が上がる。

早く廻ってしまいたい。

もしかしたら今日は来ないかもしれない。

しかし、その期待もスマレ自身の体が打ち消した。

初めてこの街に来たときに通過した道。

ちょうどその辺りでスマレの瞳が痛み出したのを思い出す。

そして、その道に差し掛かった。

「痛っ」

同じ痛みがスマレを襲う。

痛む目を押さえながら辺りを見回す。

さらに細い路地が目に入り、そこには行きたくないと体が警戒する。

足が止まりどうすればよいか考え込むスマレの後ろから、足音が聴こえてきた。

「どうなさいました？お嬢さん？」

老人の声だった。

あの妖気ではない。

安心したスマレは振り返った。

「きゃっ！！」

老人はスマレのすぐ後ろに立ち、怪しい微笑みを浮かべていた。

「失礼な子だね…心配してるのに…」

老人はスマレの目を覆う手に自分の手を伸ばす。

即座にスマレは体を後ろに引き、接触を避けた。

「…可哀想に…その瞳のせいで苦労したんだろう？」

優しい言葉とは裏腹にその風体はいかにも怪しく、スマレは少しずつ後退し距離を置く。

「どれ？見せてくれないかい？神の瞳を…ワシなら何かわかるかもしれないぞ」

「え？」

スマレが怯んだ隙に、間合いが詰まる。

「！」

その時スマレの瞳が朝が来たかのような眩しい光を発した。

「す、素晴らしい！！」

細い目を見開き、その光景を喜ぶように老人は声をあげる。
老人の震える手がぬーっとスマレに伸びる。

スマレは言うことの利かない体をなんとか動かし、老人に背を向け走り出した。

「きゃっ」

しかし、足が絡まって激しく転んでしまう。

老人は滑るように移動し、すぐスマレの前に立った。

その手はスマレの手を掴む。

「うがぁー！！」

手に触れた瞬間、スマレの服から老人の体にかけて電撃が走った。

老人はすぐさま体を離し、焼けた手を押さえスマレを睨み付ける。

「こしゃくな真似を…」

「これが、霊符の結界？」

アイリスの話が現実となり少し勇気がでる。

立ち上がろうと体を持ち上げたが、転んだときに足を挫いたようだ。
足に血が回る度に痛みが増していく。

逃げられない！

そう思い、目を瞑ったとき。

「ここまでかしらね…」

スマレがその声に顔をあげると、目の前にはさくらが立っていた。

真っ直ぐに老人と対峙する。

片手に持っているクリスタル製のロッドが月明かりに照らされ輝く。
それを体の前に構え小さく何かを呟き始めた。

さくらの紡ぐ言葉が増える度にロッドから放たれる光も増していく。

「スゴい…」

さくらの体から溢れるエネルギーにスマレの瞳も呼応するように輝きを放つ。

だが不思議と痛みはなくなり自分の体の奥深くから、スマレもわからない力が膨らんでいるのを感じた。

「ふん、人間の分際で!!」
一連の所作を老人は笑いながら眺める。

しかし、次の瞬間、老人は言葉を失い目を見開いた。

その胸元からは鋭く尖った剣の切っ先が突き出している。

「お前は妖魔だな…」

静かな声で老人の背後からイキシアが問う。

老人は体を貫かれているが、口の端はあがったままだ。

イキシアは言葉を続ける。

「このままあの女の攻撃を喰らい滅びるか、大人しく投降するか選べ」

「なぜ、わかった？私が妖魔だと」

「あの少女の服に触れたな…あの服は魔力を持たぬものには反応しない」

「ふん…」

「そう言うことだ。スマレが一般人に勘違いしているだけでは作戦が無意味になる。奴が妖魔が見極めるため、助けるのをギリギリまで待たせてもらった」

いつの間にか、アイリスがスマレの脇にしゃがみ、手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「お前の服では私しか手が貸せなくてな」

スマレを抱え起こしたアイリスはイキシアと老人の姿をした妖魔に目をやった。

さくらはまだ、魔力の弾を膨らませている。

妖魔の肩が震えた。

それは恐怖や絶望ではなく楽しんでいるような震えだった。

「どこかで嗅いだことのある臭いだと思ったら、光の戦士のエルフじゃないか！？何故、地に堕ちたのだ？」

バカにしたように大声で妖魔はイキシアに話しかける。

イキシアの細い剣、レイピアが軽く揺れた。

その僅かな動きを見逃さず妖魔の足がイキシアの胴体を真後ろに蹴り飛ばした。

「！」

イキシアは不意の攻撃に体を守りきれず、数十メートル後ろへ吹き飛ぶ。

そのまま壁へと激突し、崩れた瓦礫の中へ姿を消した。

「イキシア！」

「イキシアさん！」

スマレとアイリスが叫ぶが応答がない。

そして、妖魔は、軟体動物のように腕を伸ばし背中に刺さっているレイピアを時間をかけながら引き抜いた。

剣体は放り捨てられ、ついていた真つ赤な血が辺りに散る。

妖魔はその体の関節から、今度は白い煙を吹き上げた。

煙が妖魔を包み込むとその中の影が別の人影へと変わる。

強い風が吹き、煙りはすぐに消えた。

そこに現れたのは、先程の老人の姿とは似ても似つかない美しい顔立ちの男。

金色の長髪が揺れ、燕尾服を着たその妖魔の発する怪しく黒い妖気は『生』ではなく、『死』をイメージさせ、近づくことさえ危険を感じる。

そんな重たい空間にスマレは呑み込まれそうになるのを必死に堪えた。

まだ胸の奥から止まることなく溢れそうなエネルギーは募り続けていることを言葉にはできずに。

妖魔は奇妙な笑みを浮かべてこちらを見ている。

「まずは自己紹介。僕は三番目の吸血鬼。貴女に会えて良かった」
その瞳はスマレをじっと見つめる。

「スマレ」

アイリスがスマレに囁く。

「走れるか？」

「え？」

「『純正団』の名に賭けてお前だけは生かさねばならない」
アイリスのその表情は真剣だった。

「そんな、イキシアさんは？」

胸の奥がさらに熱くなる。

「私がこれを放つたら行きなさい」

さくらが呪文を唱え終わリスマレの方を向いて笑った。

「こいつの気はいままでをやつらとは桁外れよ。私もすぐ後を追うから!!」

そう告げると、さくらの視線は不適に笑う妖魔に向いた。

「人間を甘く見ないでよ!!」

さくらは巨大な光の弾をロッドの先から妖魔に向けて放つ。
その勢いで辺りの物体が風に舞い上がる。

スマレも吹き飛ばされそうになるのを耐えるのが精一杯だった。

「すごい……」

人間の女の子がこんな力を放出できることに、眩しい光の中で驚愕した。

まだまだ光は続く。

誰かがスマイレの手をとる。その手に引かれるままスマイレは痛む足を引きずりながら、走り出した。

第1章 闇の足音（後書き）

ありがとうございました！

第1章は次話で終わりです！！

スミレたちはどうなってしまうのでしょうか？

次回の更新をお待ちくださいm——（ m

第1章 光の足音（前書き）

第1章 最終話です。

妖魔と対峙したスミレたちは無事に逃げられるのでしょうか？

第1章 光の足音

激しい光の中を抜けると、アイリスが険しい顔でただスミレの手を引いていた。

「イキシアさんとさくらさんは!？」

スミレの問いには答えない。

捕まれた手からもアイリスの気持ちはわからない。

しばらくするともう一度爆音が響いた。

だがそれもすぐ収まり、街には静寂が戻る。

「どうして逃げるんですか!さくらさんの魔法でやつつけたんですよ!？」

無理をしてアイリスの早さについて走ったことで、スミレの息は切れ、額に汗が浮かんできた。

アイリスが走るのをやめる。

「あれでは無理だ…」

「?」

「あれではあいつの足止めにしかない」

「え?」

「しかし、イキシアも、さくらもあんな妖魔には負けない」

「でも…」

自分が足手まといなのだ。

こんな作戦受けなければよかったと、後悔だけが胸を締め付けた。

「出会つてすぐには難しいかもしれないが、幾多の激戦をくぐり抜けてきたものたちだ、きっと合流できると信じてやってくれ」

アイリスはただ前だけを見て言った。

まるで、自分にいい聞かせるように。

だがすぐにまた不安がスマレの体を駆けた。

スマレの瞳が痛み出す。

同時にアイリスがスマレを隠すように前に立った。

「スマレ、この階段を下った裏手に城の中まで続く地下道がある…」

アイリスはスマレに目線だけで場所を指し示す。

「行けるか？城へ行き応援を呼んできてほしい」

目線の先には水路へ降りる階段がある。

ここからでは確認はできないが、疑っている余裕はない。

アイリスの背中ではそれ以上は語らず、そこを動こうとはしない。

「…わかりました…」

スマレが足を向けた瞬間。

「あなたはこちらへ来るんですよ」

あの妖魔の声がすぐ近くで聞こえた。

「行けっ!!」

アイリスが足を止めたスマレの背中を押した。

次の瞬間、アイリスの手元からいくつものクナイが風を斬り、妖魔の元へ飛ぶ。

そのうちのいくつかは妖魔の後ろの壁に突き刺さり、いくつかは妖魔の手のひらから浮き出ている魔方陣に当たり、鉄の音を響かせ地面に落ちた。

「残念ながら、貴女と遊んでいる場合ではないんですよ。私の使命はその瞳の奪取。まさかそちらから来てくれるとはね…」

妖魔が手を振るとクナイのひとつがアイリスの肩に突き刺さる。

「くっ！」

「アイリスさん！」

「何をしている！早く！！！」

「邪魔をするな！！！」

妖魔はアイリスに向かって手をかざした。

そこから激しい突風が起こる。

アイリスは巻き上がった風と共に後ろへ吹き飛ばされ、建物にぶつかり、イキシア同様に瓦礫の下敷きとなった。

「アイリスさん！」

「ふふふっもう、君を守るものは何もない。ちなみに、他の人たちは来ないよ。君たちを見つけてすぐに外からは入れない結界をこの辺りに張らせてもらったから」

妖魔は陽気に話しながらゆっくりと歩いてくる。

スミレは迫り来る妖魔と間を空けようと後退するが、壁にぶつかってしまふ。

もう逃げ場はなかった。

「はあ…問題は君を連れていけないこと…その服が厄介だ…ん！そうか…」

急に妖魔の顔が喜悦に歪む。

「…頭を切り取って持っていくでしょう」

「！」

人を人とも思わない卑劣な顔を近くで見せられ、スマレは恐怖で言葉が出ない。

「貴女のその瞳、我が父が世界を手に入れるために使われるのだ。有り難く思いなさい」

妖魔が腕を伸ばしスマレの前に出す。

その爪は鋭い短剣のように変形した。

「観念しなさい…」

「こ、こんな瞳のせいで…私のせいで、イクシアさん、さくらさん、アイリスさんが…」

恐怖と悲しみで体は動かず、もうただ事が終わるのを待つだけだった。

目を瞑る。

涙がこぼれた。

体の中で膨らんでいた得体の知れない力は、諦めたスマイレの心と同調し静かに治まっていく。

ふと、バラのような高貴な花の香りが通った気がした。

そうか、あの横暴王子の香りはバラだったのか。

急にどうでもいいことに気づく。

そんなことより、あの横暴王子のせいでこんなことになったんじゃないか？

なんだか、あの男に一言言ってやりたい。

腹が立ってきた。

そんなことがぐるぐると頭の中を駆け巡る。

そして、胸の奥からまた、あの力が湧き出してくるのがわかった。

スマイレは目を開ける。

じわじわと瞳の光量が上がっていく。

その光の中から、声が聴こえてきた。

「観念するのは、貴様の方だ」

聞き覚えのある凜としたよく通る声。

幻聴だろうか？耳を澄ます。

「その女に手を出すな。そいつは、俺様のものだ」

「は？」

その台詞にスマレは目を見開くと同時に、光が消えた。

周りの様子が瞳に映り出される。

とりあえず、まだ、自分は生きている。

目の前にはまだ、妖魔が存在していた。

「！」

だが、その表情は苦悶に満ちている。

妖魔の手足は鎖のようなもので締め付けられていたのだ。

目の前の状況が全くわからない。

ただ、自分はいま無事でいる。

それだけで緊張の糸が切れると、急に体の力が抜け、地面に倒れそうになった。

「？」

だが、そのスマイレの体を力強い腕がしっかりと受け止めた。

一瞬電気が通った気がしたがその腕の中で顔を上げる。

なびく黒い髪に、赤みを帯びた優しい眼差しがそこにあった。

「クロさん?!」

「すまない、遅くなった」

クロは反対側の腕にさくらを抱えている。

「さくらさん、無事だったんですね!」

「魔力の使いすぎで憔悴しきって気を失っているだけだ。休めば問題はない」

スマイレの服からピリピリと電気が起こっている。

クロがスマレから離れた。

そして妖魔に目をやると、まだ、物体とも言えない鎖に体を締め付けられもがいている。

「イキシア回収」

声の方を見ると、大聖堂にいた長い髪を縛っている優しい笑顔の男が、イキシアを背負ってやって来た。

「アイリスも無事ですよ」

また違う声がした。

辺りを見回すと、スラッとした見たことのない男が、瓦礫の中から救出したアイリスを抱えこちらに向かう。

「お、お前ら…ど、どうやって結界内に…」

妖魔が声を絞り出す。

「ふん、これが結界だと？」

そして、さらにもうひとつの足音がコツリコツリ、ゆっくりと時間をかけながらこちらに近づいてきた。

暗闇の中、余裕と気品を辺りに撒き散らし、いかにも特別な存在を

アピールするかのように、その声の主はスミレの前に姿を現した。

「…シロ様？」

そこには、あのシロが立っていた。

城の中での清楚な真っ白いマントではなく、正反対の真っ黒いコート。

それは王子と言うイメージを全く感じさせない出で立ちだった。

シロはそのままスミレの前まで歩いて来ると、スミレの頭に手を乗せ、白くきれいな指で涙の跡をぬぐう。

「悪かったな、怖い思いをさせて…」

そして優しく微笑んだ。

「よくも私の大切なものを傷つけてくれたな…残念ながら貴様にはここで消えてもらう」

シロは低い声で妖魔に向かって立ち、怒りを露にする。

一層きつく睨み付けると、妖魔の体に巻かれた鎖はさらに体を締め付けた。

「うがああああ」

シロが手のひらを妖魔にかざす。

それだけで先程のアイリスのように一瞬にして妖魔は吹き飛び、遠くの柱に激突した。

さらにシロはかざした手を握る。

すると吹き飛んでボロボロになった妖魔が一瞬にしてシロの前に飛んできて、その前で止まった。

妖魔の襟を掴み、顔を近づけて怒りに満ちた表情を向ける。

「紛い物の鬼よ。貴様には見えぬのか？本物の妖気の恐怖が」

妖魔はあまりの力の差に絶望し、恐怖に顔を歪ませた。

「…お前…は…一体…」

「地獄へ堕ちろ！」

想像できるはずのない、シロの変貌に、スミレの背筋が凍てついた。

「あれは、本当にシロ様なんですか？」

クロに問いかけるが、そこには気を失い地面に倒れているさくらの姿しかなかった。

「がああああつ!!」

突然、街中に断末魔の叫びが響き渡った。

振り返ると上下に真つ二つに裂ける黒い影がビリビリと光を散らしている。

影はそのまま光と溶け合って、やがて静かに消えていった。

その向こうには真横に引かれた光の筋しかない。

光の筋を作り出していたクロの刀が、音もなく鞘に納められる。

「…倒した…の？」

スマレの声だけが街の音になる。

スマレたちに恐怖を与えた妖魔の姿はどこにもなかった。

通りの向こう側から、夜の終わりを告げる日差しが伸びてきた。

そこには『純正団』のメンバーと真つ黒な衣装に身を包むシロの姿がくつきりと浮かぶ。

朝焼けの輝きがシロのきれいな髪を照らした。

シロの体からはあの残虐な雰囲気は消え、ただ、優しく気品に満ちた笑顔を湛えながらスマレに近づいてくる。

シロがスマレの正面に立ち二人は見つめ合った。

「この国のために命を賭けてくれたこと感謝いたします」

スマレに頭を下げるシロ。

「お、遅いですよお」

スマレは、シロの態度から、確かに感じる安心感に涙が込み上げ、訳がわからなくなり、シロに飛び付こうと手を伸ばした。

「ちよっ！ちよっと待て！！」

そんな忠告も今のスマレには届かず、嬉しさのあまりスマレはシロに抱きついていた。

「うがぁぁっ」

シロとスマレに、服の効力の電気が走った。

「ああっ！すっ！すいません」

「恩を仇で返すなあ！」

痛みに涙ぐみながら、シロはスマレの頭を掴み引き離した。

「ひどい…」

少し距離をとると、シロは体勢をたて直して、コホンと咳払いをひとつしスマレに向かって、手を差し出した。

「ふ、服の触れない部分なら、平気だろう。ありがとうな…」

赤みを帯びているシロの顔を見つめながら、スマレはそつとその手を握った。

「お役に立てて何よりです！」

その手は、少し温かく感じた。

第1章 光の足音（後書き）

シロ様は完全に、オイシイトコロを持っていきました。

スミレはこれを期に更にシロ様に振り回されていきます!!

第2章 更新をお待ちください！

ここまで、駄文でありましたが我慢してお立ち寄りいただき誠にありがとうございました！

まだまだ未熟な私をこれからも見守ってくださいm(_____)m

第2章？ スミレ、匿う（前書き）

やっと第二章が更新です。

間が空いてしまいましたがシロ様は健在です！

第2章？ スミレ、匿う

スミレがこの国に来て幾日か経った。

あの長い夜が明け、妖魔や吸血鬼の話は街ではパタリと収まり、平和な生活が続く。

そんなある日の午後。

その日は朝から、城の中でメイドたちが落ち着かない様子でバタバタと走り回っていた。

皆口々にこう叫ぶ。

「王子様！どこにおいでですか」

そんな声が行き交うなかをコソコソと城の廊下をスミレは走る。

やがて、自分の部屋の前に来ると辺りを何度も見回し、誰もいないことを確認して急いで部屋に入った。

「おかえり」

そこには部屋の外の騒ぎなど気にせず、優雅に紅茶をすする国の王子であるシロの姿があった。

その様子にスミレは困惑する。

「シロ様…？一体どうするおつもりですか？」

母親のようなため息をつきながらシロの方に近づく。

「事が収まるまで厄介になるつもりだが？」

シロは当たり前のように返答する。

「こんなところに居たって解決にはなりません！」
スミレは眉を釣り上げシロを睨んだ。

事は今朝、王室での王の一言から始まった。

「シロよ」

「はい、どうなさいましたか。父上」

「お前ももう国の継承者として自覚はあるようだが、いつ命を落とすかも知れん…そろそろ后を貰わねばならぬな」

「…へ？」

急な呼び出しに慌てて来て、思いがけない言葉におかしな返事をしてしまった。

オリーブとペリドットを見やるが、表情は変えずなにも言わない。

「…し、失礼致しました、父上。ですが私はまだ、そのような事をする身ではありません…第一相手もおりませんのに…」

「いい話が来ておるのだ。ここより南の大国『チュリアーナ』の第一姫が主との婚礼を望んでおる！会ったことがあるう？あの美しき姫だ。それにあの国とのよき繋がりが築ける。悪い話ではないな？」

「いや、しかし…」

確かに何度か静養に訪れた際に姫とも面識はある。

だが、シロは姫に対していい印象がないようで、固まったまま何も言えずにいた。

「明日、早速こちらに来るそうだから、話を進めるがよい。孝行な息子を持ち世は幸せだ」

期待に胸を膨らませ満面の笑みを浮かべた王はその場を立ち去っていく。

残されたシロは膝をつき下を向いたまま動こうとしない。

「…シロ様？」

ペリドットがシロに声をかけた。

その瞬間、シロは立ち上がり、その襟元を掴んだ。

「貴様！知っていたのか？」

「シ、シロ様も国を思うのならば、よい話ではないですかあゝ？」
シロの剣幕に圧され、冷や汗をかきながら、ペリドットは懸命に話した。

「…誰があんなやつと！」

「と、とてもお美しい方ではないですかっ？」

「顔など関係ない！！」

珍しく怒り散らすシロに、黙っていたオリーブが口を開いた。

「まだ、決まったことはありませんよ。落ち着いてください。そんなことで、声を荒げるなどお恥ずかしい…」

オリーブの言葉にシロは口を閉じた。

そしてひとつため息をつき、ペリドットを掴んでいた手を離す。

「もういい…」

そう呟くと、静かにその場を立ち去った。

それからしばらくしてスミレの部屋に勝手に上がり込み、今、このような状態なのである。

「いい加減にしてください！いい国ではないですか？あそこに行つたときも姫様にお会いしましたが、とても綺麗なお方でしたよ？なんの問題があるのです？」

スミレは何とか説得して、出ていってもらいたい一心で話す。

こんなところに匿っているなど知られたらどうなるか。

ヒヤヒヤしていた。

それに、国の公務はシロの関わる所もあるため皆真剣に探している。

「チツうるさい女だな」

そんなシロの心ない一言で、スミレの頭の線が切れた音がした。

「そーですかあゝでは、うるさいついでに叫びますよゝゝ！みーなーさー……」

「バカつよせ！！」

シロが慌てて立ち上がり、スミレの口を後ろから塞いだ。

「！」

甘い香りが二人を包む。

シロに抱き寄せられ、その綺麗な顔がすぐそばにある。そして、スミレの心臓が大きく跳ねる。

シロも、突然の行動にしても、スミレを抱き締めてしまったことに
気付き、なぜだか心音が高まった。

シロの緩んだ手をつかみ、スミレは振り返る。

二人は見つめあった。

ほんの少しの時間がゆつくりと流れたが、お互いにすぐ我に返り、
体を離して背を向けあった。

二人ともが、鳴り止まない鼓動を抑えるまで沈黙が続く。

「いや…」

「えっと…」

「お、俺はまだやることがあつてだな…吸血鬼の件にしても、今は
落ち着いてはいるが、根本の解決にはなっていない…大本はまだ
のうのうと何かを企んでいるのではないかと…って、何言ってるん
だ！俺は！」

シロは言い訳をしている自分に腹がたち、落ち着こうと髪をかき上
げた。

三体目の吸血鬼を倒す際、その口からこぼれた黒幕の存在。

まだ終わってはいなかった。

それはスマレもわかっていた事だ。

「そ、それとこれとは違いますか？」

「ちがくない！！そんなことで浮かれている場合ではないと言っているのだ！」

「確かに、そうですね…」

「?!」

二人とは違うもう一つの声がドアの方から聴こえた。

慌てて振り向くとそこには腕を組んで立ち尽くす、クロの姿があった。

その顔は明らかに呆れ顔である。

「クロさん?! い、いつからそこに!」

「スマレが目立ちすぎなのだ」

ずっと後を付けてきたようだ。

では、先ほどの一連のやり取りも見られていたのでは…

「もしかして…い、今の見てました？」

スミレは恥ずかしくなって目線を下げながら訊ねた。

「まさか、お二人がそのような関係だったとは…」

表情は真剣だ。

「ち、違っぞ！」

先に叫んだのはシロだった。

「シロ様もお決めになった人がいるなら、そう言えばいい」

「…は？」

クロは感慨深げに目を瞑る。

シロはクロの言っていることが全く意味がわからない様子でスミレを見た。

しかし、スミレはあの妖魔との戦いの中での幻聴を思い出した。

『そいつは、俺様のものだ』あれが、幻聴ではなかったら…

そう考えていると急に、今さっき抱き締められたシロの香りと体温がよみがえってきた。

スマレの顔が火照りだす。

「意味がわからない。おい、クロを追い出せ…な、なんで顔を赤くしているんだ!!」

「何でもないですう!!」

心なしか、シロも顔を赤くしているようだ。

追い討ちをかけるようにクロが訊ねる。

「では、『そいつは、俺様のものだ』とはどういう意味でしたか？」

「え？」

クロの言葉にまたスマレは耳を疑った。

あれは、本当にシロが言った台詞だったということか…

「…そ…そんなこと言ってないぞ。そんなことより、この部屋の風呂は使えるのか？」

無理矢理に話をすり替えてきた辺り怪しいのだが、スミレも恥ずかしさのあまりシロの話に乗ってしまう。

「ええ…いいお部屋使わせていただいてますし」

「よし、準備をしろ。バラを摘んでこい」

「バラ？ですか？」

たしかにシロからはいつもバラの香りが漂っている。

「マントの香りかと…」

「この俺が衣服の香りで誤魔化していると思っていたのか」

「違うんですか？失礼します！！」

スミレは躊躇なくシロの肩に手を置き、その髪に顔を近づけて匂いを嗅いだ。

「ほんとだ！」

シロの髪からはバラの高貴で甘い、いい香りがした。

同時に辺りが静まり返る。

シロの肩が震え、眉間にしわが寄り始めた。

「さ、シロ様が憤慨なさる前に一緒に摘みに行くぞ!!」

その雰囲気を感じたクロがスマレの腕を掴み、シロから引き離す。

「え!?!」

そのままスマレはクロに引きずられるように部屋を出ていった。

シロだけをその場に残して。

第2章？ スミレ、匿う（後書き）

お読みいただきありがとうございます！

自分勝手なシロ様にスミレは相変わらず振り回されていきます。
政略結婚編。とでも言い換えられる第二章は少々恋愛要素を織り混ぜて進行していきます。

どうぞ、これからもよろしくお願い致します！！

第2章？ バラの庭園（前書き）

シロのわがままからクロとバラを摘みに出たスミレはとある再会を果たします。

シロやクロとスミレの関係中心です。

どうぞご一読ください！

第2章？ バラの庭園

クロに連れ出され、城内の広大な敷地の裏手にある森の中を二人で並んで歩いている。

スミレはそつとクロを見上げた。

長身で、ガタイがいいと言うわけではないが、細いわけでもなく、着流しが似合ういい体格をしている。

顔にかかる黒い髪が風にさらさら揺れ、木陰から漏れるオレンジ色の陽射しが凛々しい横顔を写し出した。

この男は一体何者なのか。

スミレにわかることは人では敵うはずのない妖魔を一撃で切り裂くほどの剣の腕。

ここに来る以前の記憶がなく、シロに忠誠を誓い命を預けていると言うこと。

確実にシロが何か知っているのだ。

しかし、シロも解らないことが多すぎる。

シロはほんとに王子なのか？

黙っていれば疑われない容姿に漂う品格。

なのにあの横暴さ…

そしてあの夜の残忍な瞳…

今日にしてもなぜスマレの部屋なのか…

シロは…

シロが…

シロなんて…

「私ってばシロ様のことばかり…」

いつの間にかシロのことで頭が一杯になっていることに気付き、大きく頭を振る。

「なにをしているのだ?」

クロが不思議な物を見る目でスマレを覗き込んでいた。

「な、何でもないですっ頭の体操です…」

「…そうか」

特に気にする様子もなく、クロはまた、前を向き歩いていく。

しばらく無言になり、耐えられなくなったスミレが口を開いた。

「あの、クロさん、もう怪我はいいのですか？」

「…ああ」

間は空いたがきちんと返答がある。

安心したスミレはさらに聞きたいことを訊ねた。

「さくらさん、元気ですか？」

「…ああ、さくらはあれくらいでは、へばらない」

「…他の皆さんはどうされてるんでしょうか…」

クロの足が止まった。

なにか気に障ることでも言ったのか、スミレは小さくなりクロを見上げた。

「お前は…」

「な、なんですか」

スマレを見つめるクロのまっすぐな視線に感情はない。
何を言われるのか緊張した。

「面白い女だな」

そして、クロの無表情が少しだけ柔らかくなる。

「えっ？」

「…シロ様が気に入るわけだ」

「えっ！いやっ、だから…あの、あれは…！」

「いや、お前が来てから、シロ様が変わった気がする。よくはわからないが…止まり木を見つけた鳥のような…」

「わ、私なんてなにも…」

「そうか？」

急に何を言うのかと思えばシロの話。
だが、シロの話をするクロが少し優しい顔に見えた。

クロにもやはり表情はあったようだ。

「着いたぞ…」

クロが小さく呟く。

突然、森を抜けた。

あまりにも眩しくて、スミレは一度、目を瞑るが、すぐに開ける。

そこには想像できない全く別の世界が広がっていたのだ。

色とりどりの花たちが地平線の彼方まで果てなく続き、優しく吹く風に花びらが空へと自由に舞い上がる。

まるで、花たちだけの楽園のような世界。

「こ、こんなの見たことありません!」

スミレは感動のあまり、端から端まで夢中で何度も見回す。

反して、クロは無言でこの淡いキャンバスを見つめていた。

「お前たちも来ていたのか?」

急に後ろから声をかけられる。

スミレが振り向くとそこには、この美しい庭園を背景にしても全く

違和感のない佇まいのイキシアが立っていた。

「イキシアさん！！無事だったんですね！！」

思わぬ再会。

スミレはあまりの嬉しさに我を忘れてイキシアに飛び付いた。

「おっ！おい…」

「ご無事でよかったです…私のせいでごめんなさい…」

イキシアの胸のなかにスミレは顔を埋め、しっかりと抱き締める。

スミレの行動に驚いていたイキシアも、そっとスミレの頭を撫でた。

「お前が気にすることではないさ。むしろ、護ると誓いながら情けない姿を晒してしまい、申し訳なかったな…」

イキシアは険しい表情を浮かべながら話した。

「体の方はもういいのか？」

クロが問いかける。

「ふん、お前にしては、愚問だな…私は神の国のエルフだぞ…あんな傷…」

「そうか…」

二人は通じるところがあるようで、クロもそれ以上は聞くことはない。

「スマレ、アイリスには会ったか？あいつの方が心配だ」

「アイリスさんが？」

スマレはクロの方を振り向くが、クロは肩をあげただけ。

「なにも聞いていないが…」

何も知らないようだ。

急に不安になる。

「あいつのことだ、きっと無事でいるとは思うが、私と違い、生身の人間だ。」

妖魔の手から生まれた突風により吹き飛び、瓦礫の下敷きとなったアイリス。

あれから何日か経ったといっても無傷なわけではない。

同じく派手に蹴り飛ばされたイクシアや全身に包帯を巻いていたクロのたちの回復能力が普通ではないのだ。

クロがスマレを見下ろしながら訊ねる。

「アイリスのところにも顔を出してみるか…」

「はい！行きましょう！！」

クロの提案にスマレはすぐに答えた。

そして二人はシロ用のバラと、アイリスの見舞い用のバラを摘んで、花の楽園を後にした。

イキシアはスマレにアイリスのことを頼み、一人だけ花園に残る。

夕焼けがイキシアの影を伸ばす。

何か大切なものを護る棘に包まれているかのように、その姿は、周りの何者も近づけさせない空気を纏っていた。

城内に戻るとクロの案内でアイリスの部屋の前に着く。
ドアを二回ノックしてみたが返事はない。

「失礼します」

スマレはそっと取っ手を回し、部屋の扉を開ける。

しかし、そこにはアイリスの姿はなかった。

「今は出ているようだな…仕方ない。アイリスの件は俺が調べる。
スマレは先にシロ様のところへ帰っていてくれ。あの人のことだ、

淋しがっているに違いない…」

「えっ！シロ様って、淋しがりやなんですか…」

「…」

しゃべりすぎたと後悔したクロはそれ以上はなににも言わず、スタスタとどこかへ去っていった。

「シロ様のもとへ帰って…私の部屋なんだけど…」

納得のいかない表情で、スマレは自分の部屋に入る。

入った瞬間、自分の部屋では感じない緊張感に足を止め顔をあげた。

そこには眉間にシワを寄せ今にも怒りを爆発させそうなシロの他に、もう一人の人物がいた。

会いたかったその姿を見つけると、突然の入室に驚く二人など気にせず、そこにいたアイリスに飛び付いた。

「スマレ!？」

「良かった!」

「お前っ、ノックをしろ!!」

シロの注意など耳には入らない。

やがてアイリスが声を出した。

「傷が痛む。放してくれ…」

困りながらも、アイリスは優しく微笑む。

「あのときは私のせいで、ごめんなさい…私が役に立たないばかりに」

「何を言っている…私の方こそ。すまなかった…」

「なんだお前、そんなことを気にしていたのか…」

仲間はずれにされたのが気に入らなかったのか、ややふてくされた口調で、シロは2人を見る。

「…そんなことより！！摘んできたのか？」

「ああっ！はいっ！」

スミレは自慢げに両手に一杯のバラを差し出そうと手を前に出す。

しかし、そのバラはアイリスとスミレの足元にいつの間にか花畑を

作っていた。

「ああ〜っ」

慌てて床のバラをかき集め拾う。

「貴様、俺様にそんな落ちたものを使えと言っのか…」

シロが顔面を歪ませながらスマレを見下ろす。

「むっ…わがまま言うなら次は自分で行ってください！それに、ここは私の部屋です！！文句があるなら出ていってください！」

「なんだと！！」

「何ですか！？」

「だ、だいたいな！クロが付いていながら、何でこんなに遅いんだ？クロはどうした？」

「えっと…アイリスさんを探しに…」

「あいつ…」

「すみません…」

「？」

「淋しかったです?」

「なっ!」

シロの顔がどんどん赤くなっていく。

「ふふっ」

二人の後ろでアイリスが楽しそうに声を出した。

「何が可笑しい!?!」

突然起こるアイリスの笑いに、シロは苛立ちの顔でそちらを見る。

「シロ様が王子であることを忘れそうで」

「どういうことだ?」

「そのような言い合い初めて聞きました! なんだか、安心しました」

アイリスがまた、優しく微笑む。

「わけがわからない!」

シロは困った顔をスマレに向けた。

スミレもまたシロと首をかしげる。

「はぁ……」

ため息をつき、冷静になったシロは眉間に寄っていたシワを伸ばし、背筋を正す。

「俺としたことが……」

アイリスの前に立ち、いつもの顔を向けた。

「……アイリス、あとのことは頼んだ、状況がわかり次第報告を。下がっていいぞ」

「……御意……ふっ」

表情に無理があることを悟ったアイリスは笑いをこらえきれない。

「笑うなっ……笑う所ではない」

つい怒鳴りそうになるのをこらえて、平静を装うシロの姿がまた可笑しいのか、アイリスは肩を震わせながら立ち去った。

「なんなんだ……一体……」

アイリスがいなくなるとシロはまた、ため息をつきながら、髪をかきあげた。

「シロ様？花はそのまま浮かべればいいですか？」

今までのやり取りがなかったかのように風呂場の方からスマレがシロに話しかけてきた。

「は?...ああ」

そうやって微笑むスマレにシロも怒りを忘れる。

「...もう、いい。あとは俺がやる。お前は怪しまれる前に仕事にもどれ」

シロは上着を脱ぎシャツの袖をまくりながら、スマレの方に寄ってきた。

「え?でも...」

「それくらい出来る。それともお前は俺の入浴を覗くつもりか?」

シロが呆れながらスマレの手元にあったバラを奪う。

「ちちちがいます!!」

「違うなら出ていけ...一緒に入るのならば許可してやらないでもないがな...」

シロが怪しく笑いながらスマレに顔を近づけ自分の胸元のスカーフを外す。

「え...遠慮しま...っす!」

スミレは真っ赤になりながらシロの腕の下をくぐり抜け逃げるように部屋を後にした。

「はぁ……」

床に落ちたバラの花びらをシロはじっと見つめ、軽く胸元を押さえる。

「どいつもこいつも……」

誰もいない部屋にシロの声だけが寂しく響いた。

第2章？ バラの庭園（後書き）

ありがとうございました！

ため息王子。

シロ君がんばれと言いたくなってしまった…

次回は同棲？生活も夜々朝…

シロとスミレの間に何か起こるのでしょうか？？

更新をお待ちください！

第2章？ 夜の出来事（前書き）

シロがスマイレの部屋に上がり込み、夜が来ました。さて、二人に起こることは…

第2章？ 夜の出来事

「…眠れない…」

スミレは月明かりしか入らない夜中の、何も映らない天井を見つめながら、もう何時間も、目を開けたり閉じたりを繰り返している。

見慣れた天井が、少し位置が変わるだけでこんなにも寝れないのか。

風呂騒動のあと、クロが持ってきた布団というものに寝てはいるが、固い床のせいで寝れないのか。

「んっ」

いや…

人のベッドの上で、幸せそうな声をあげ、自分だけすやすやと眠るあの男のせいなのは間違いない。

「やっぱり、アヤメさんの部屋に行こう」と

スミレは床に敷いた布団のセットを畳み、上着を羽織った。

「…」

ふと、シロの寝顔が気になる。

「…よだれ垂らしてたりして…」

スマレはそつと近づきシロの顔をのぞきこんだ。

「ふふっ…」

この際弱点でも掴んでやる。
そんなつもりだった。

窓から入る少しの月明かりにシロの白い肌と髪が照らされ、その顔もはつきりと現れる。

静かな寝息が少しだけ開いた口から漏れ、柔らかくつぶられた目からは長いまつげが伸びる。

眉毛もきれいに整い、前髪が自然と横に流れる。
作られた人形のようにきれいな顔がそこにあった。

スマレは少年のように静かに眠るシロに見とれてしまう。

「かわいい顔…」

言葉が漏れる。

その言葉に反応したのか、シロの眉毛が少し動いた。

「いけないっ…」

起こしてしまうのは悪い気がしてスマレは自分の口を塞ぐ。

だが次の瞬間、シロの瞳がスマレを見つめていた。

「！」

「…なんだ？」

「ああっ！！すみませんっ」

驚き慌てるスマレとは対照的に、シロは全く動かず、ただまっすぐにスマレの目を見つめている。

そして、また静かに目を閉じた。

そのまま、シロはゆっくりと聴き心地のいい寝息をたて始める。

「…びつくりした…あれ？寝ちゃいました？」

返事はない。

その表情は安心しきっているようにも見えた。

布団と一緒にクロがシロの枕を持って戻り、そのお陰で眠れている

のだらう。

シロの寝顔を見ていると、自分も寝れる気がしてきた。

布団を敷き直そうとシロの横を離れたとき…

「つつ…つつ…」

静かだった部屋に突然、シロの苦しそうな声が響いた。

振り返ると、さっきまで幸せそうな顔で眠っていたはずのシロが、今度は苦悶の表情でうずくまっている。

手は必死に胸元を押さえ、額には汗が浮かんでいた。

明らかに普通でない状態に、スマレはシロの側に戻り背中に手を伸ばす。

「シロ様！？大丈夫ですか！？どこか痛みますか？」

返事の代わりに苦しげな息遣いが返ってくる。

「どっしり…」

目の前のシロの異変が、あまりに突然すぎてどうすればいいのか。ただ、苦しむシロを見ているしかなかった。

ふと、クロの顔が頭をよぎる。

「クロさんなら!!」

「…ま、て…」

「!?!」

慌ててその場を駆け出そうとしたスマレの腕をシロが掴んだ。

「シロ様!?!大丈夫なんですか?」

「…っ…大丈夫、だ…すぐ、治まる…はあっ…」

「でも、辛そうです!!」

「静かに…してろ…」

押し潰されそうな苦しみに大きく声を出さないよう耐えるシロの手を、スマレが掴んだ。

「!?!」

シロはその手を力強く握り返し自分の中の何か黒い存在を打ち消そ

うと悶える。

「シロ様…」

お互い、握る手に力が入っていた。

どれだけの時間が経ったかはわからない。

やっとシロの呼吸が整い始めた。
まだ身体に力が入らない。

苦痛からは解放されたが、しばらく放心が続く。

いつも通りなにも感じないと思ったときふと手が暖かいことに気づく。

この存在は、幻だと思っていた。

「スミ、レ？」

スミレは、シロの手を優しく握りそのままベッドに上半身だけ体を預け眠る。

シロはしばらくその寝顔を見ながら、そっと繋がれた手を放した。

そして軽くスマレの頭を撫でる。

シロの表情は安堵感で満たされていた。

「シロ様が!!」

シロの苦しむ顔が頭に浮かび、スマレは慌てて飛び起きる。

「あれ？」

いつもの朝の風景だった。

眩しい日差しがスマレの部屋に差し込む。

「…ベッドに寝てる…確かシロ様が…」

辺りを見回してもその姿はない。

昨夜の出来事を思い出しても、なんだか夢だったような気がしてき
た。

しかし、この部屋では薫ることのないバラの香りが微かに広がって
いる。

ベッドにはその匂いが染み付いているように感じたが、それはどうやら風呂場の方から漂う匂いのようだ。

「まさか…」

その瞬間、風呂場のドアが開かれ、いい匂いのする湯気と共に人影が出てきた。

「ふう〜」

その人物は爽やかな声をあげ、バスタオルを腰に巻き、均整のとれた上半身の肉体を披露しながら、頭をタオルで拭いている。

濡れた白い髪が見え、タオルから顔を出した。

視線を感じる先を見る。

目が合った。

「い、いやああっ!!」

見慣れないものを見てしまい、隠れるように布団を被るスミレ。

その声に驚き動けなくなるシロ。

「おっお前っ、いつの間に起きたんだ!？」

やっと状況を理解したシロがスマレに近づいてくる。

「来ないでください!!何か着てください!!」

布団の中から必死に叫ぶ。

「だから、さわくなっ!!」

近くに裸の男がいる。

女だらけで旅をしてきたスマレには耐えられない光景だった。

しばらく時間が経つ。

スマレはシロが服を着たのか確認のため布団をそつと捲った。

「きゃーっ」

その前にはスマレの声にまた驚くシロの姿があり、下はどうやらズボンを履いたようだが、手にはシャツを持っている状態である。

シロの透き通るような白くきれいな肌が眩しい。

「の、覗くなっ！」

何故かシロも恥ずかしそうに慌ててシャツを羽織る。

「のの覗いてなんかな…きゃーっ！！」

目のやり場がなく瞳をぐるぐる回すスマレの目の前にシロが近づいてきた。

まだ少し濡れた前髪が色っぽい状態のまま、スマレに顔を寄せ、困惑の表情を浮かべている。

「…頼む、なにもしないから…落ち着いてくれないか？」

幼い子供をなだめるような優しい口調のシロに、スマレもやっと我を取り戻した。

「うう…はい…」

小さく返事をする。

ふとシロのはだける胸元に目がいった。

肩から左胸にかけてなにか紋様のようなものが黒く刻まれている事に気づいたスマレはそれに手を伸ばす。

「触るな!!」

「？」

スマレが触れようとした瞬間、シロはスマレの腕をきつく掴んだ。

そして、スマレの瞳を覗く。

「…やはり反応したか」

シロの顔に影が落ちたようだった。

「い、いやあああつー!!…どういついんですのぉ!!」

「!!」

「?!」

突然スマレの部屋の入り口から甲高い悲鳴が聞こえた。

二人は驚き振り向く。

そこには、慌ててドアを閉めるクロ。

そして、豪華なドレスを着込みきれいな金色の長い髪をまとめた、いかにもお姫様という雰囲気の人物が、目を見開き、今にも気を失いそうな様子でこちらを凝視していた。

「エリカ…」

「シ、シロ様…お許してください！」

クロが二人に向かって頭を下げている。

「は？何が…」

上着のはだけるシロ、布団に入るスマレ、見つめ合う二人…

お互いが今の状況を冷静になって考えたとき…

「きゃー！ー！」

ドンッ！！

「イタあつー！！」

スミレが思いっきりシロをベッドから突き落とした。

シロは床に尻餅をつく。

「王子っ！！」

エリカと呼ばれた人物がすぐにシロに駆け寄り、スミレを睨んだ。

だが、スミレは恥ずかしさで布団を被って出てこれない。

「ほんと、お前、俺の事なんだと思ってるんだ…」

シロはぶつぶつ文句を言いながら腰に手を当てながら立ち上がる。

手を差し伸べるエリカは無視していた。

「王子…」

絞り出すような声をだし、エリカはシロを見つめている。

「あ、居たんだ…」

シロは気まずそうに小さくひとつ呟き一度深くまばたきをした。

「エリカ姫。お早いお着きでしたね。お疲れでしょう。この様なところをお見せしてしまい、申し訳ない。ただからかっていただけですよ。はっはっは。」

そういつて、エリカの手を取りにつこり微笑む。

「……」

シロの笑顔にエリカは顔を紅潮させ、目を潤ませる。

「王子…私の方こそ突然押し掛けてしまい、声をあげてしまったこと、お詫びいたします。あまり、その…お遊びにならないでくださいね…」

「あ、単純…」

聞こえない声で、スミレは呟いた。

「エリカ姫。このような場所はあなたには似合いません。お部屋をご用意してますから、そちらへお越してください。クロ…」

シロはクロに冷たい眼差しを送った。

クロはバツが悪そうに視線を反らす。

「エリカ姫をご案内しろ」

「はっ。姫、こちらにございます」

クロは扉を開けエリカと部屋を出ていった。

二人がいなくなったことを確認すると、シロはあからさまに機嫌が悪い顔をスマイレに向ける。

「クロめ、何故ここに連れてきたのだ！しかも、せっかくの風呂上がり後の紅茶タイムも削ることとなったじゃないか！」

そっぴいながら自分の服を着込む。

スマイレがベッドから飛び起き、シロの上着を持ち、シロはそれに袖を通す。

「では、行ってくる」

「あ、はい、いつてらっしゃいませ」

スマイレの部屋のドアがしまる瞬間。

まるで夫婦のような会話だったかなと、お互い少し可笑しくなった。

第2章？ 夜の出来事（後書き）

ありがとうございました。

いきなりの展開！というか、シロ様全開…（笑）

スマレがかわいそう…

そんなこんなで次回をお待ちください！

第2章？ 近づく闇（前書き）

さて、シロとスミレの関係も気になりますが…物語は進んでいきます。

その繋ぎのお話です。

どうぞ、ご覧ください。

第2章？ 近づく闇

「エリカ姫、遠き所よくぞ参られた。歓迎する。そなたの国と比べ何も無いところだが、旅の疲れを癒されよ。…シロ、姫のことよろしく頼むぞ」

「はい、父上。私でよろしければお任せください」

そういいながら頭を下げたシロは明らかに渋い顔をしている。

そんな表情にも全く気づかずに、王は期待を込めた眼差しをシロとその隣にいる隣国の姫、エリカに向けた。

エリカもまた、シロに会えたことだけに喜びを感じ、笑顔が絶えない。

「さ、シロ王子様！！この素敵な城内を案内してくださいませんか？」

早速エリカはシロの腕をつかみ立たせると自分の方へ強引に引き寄せた。

「えっ…！？」

王の前で、急に体を密着され、慌てるシロなど気にせず、エリカは無邪気な笑顔を王に向けながら頭を下げ、その場からシロを引きずり退室していった。

「相変わらず仲の良い二人だ」

王は微笑みながら二人を見送った。

「やはりここから見る聖なる大樹は素晴らしいですわ!!」

シロとエリカの二人はお互いに従者を引き連れながらも、城の中でウェンダブルの国が一望できる、見晴らしのいい展望室へ来ていた。そこは窓枠だけで窓ガラスはなく、涼しい風が心地よく吹き抜ける。

シロは吹き抜ける風にマントをなびかせながら、一人ではしゃぐエリカを黙って見ていた。

早くこの手を離せと言わんばかりの表情を湛えながら。

「…いや、大樹は素晴らしいですが、あれのお陰で妖魔は来ます…」

「…私、街も見に行きたいんですの」

「あなたが行くほどの街ではありませんよ。まだまだ治安も安定していませんし」

「なんだか、シロ、久しぶりにお会いしたのに…ご迷惑でしたわよね…」

シロの抵抗に、元気に振る舞うエリカの表情が曇る。

「くしゅん!!」

エリカがくしゃみをひとつした。

その次の瞬間、エリカの肩に真っ白いマントがかけられる。

「シロ…」

シロは自分のマントを脱ぎエリカに掛けたのだ。

それはただ風邪をひいて帰られては困るという思いからだっただけ。

「高貴な香り。私、貴方にならチュリアーナ国をお渡ししても良いと、心を決め、参りました」

エリカはシロの優しさに瞳を潤ませながら、上目遣いでシロを見上げる。

そのままシロを抱き締めようと目を瞑り、両手を広げ一歩前に出た。

「あつ、あれ!？」

その腕は空振りし自分を抱き締めてしまう。

シロはその場にはいなかった。

すでに、少し離れたところに控えていたペリドットの前でなにか話している。

「あのマントは使えなくなった、新しいのをすぐに用意してくれ」

「はいっ」

ペリドットはすぐに階段を下っていく。

「…シロ様…どれだけ苦手とされてるんですか…」

オリーブ、ペリドットと一緒に付き従っていたクロがボソツと呟いた。

「うるさい！！大体お前な、何であんなところに奴を通したのだ！！」

シロはエリカに聴こえないように小声でクロに不満をぶつけた。

「？」

しかしクロはシロの怒る理由がわからない。

しばらく考え込み。

「ああ…シロ様…あれは…」

「…もついい…お前の顔などみたくない。さくらのところへでも行ってしまう」

そういうとシロはクロを睨み付けそのまま背を向け、エリカの元へ戻っていった。

「…」

クロは首をかしげながらその場から静かに姿を消した。

「シロ様ったら…」

オリーブは呆れ顔でシロを見る。

「お隣を空けてしまい申し訳ありません、余計な従者を払ってまいりました。どうされましたか？」

不機嫌なままシロはエリカの元へ戻った。

不自然な格好のエリカにシロは不思議な顔を向ける。

エリカは慌てて体勢を直し、シロの手をとった。

「な、何でもありませんわ。ここはとても見晴らしがよく気持ちのいい場所ですが他にも案内していただけますか？」

シロにつこりと微笑むが、シロは全く表情を変えない。

「うーん…そうですね、では湖の方へ行ってみましょうか？」

「ええ。是非!!」

シロの誘いが嬉しかったのか、エリカはシロの手を引き寄せると、腕を力強く絡めた。

シロの顔がまた歪む。

「今度は湖に向かったようねっ!!」

城内の窓から双眼鏡で、外を歩く二人を観察しながらアヤメが言った。

「アヤメさん…覗きですか?」

掃き掃除をしていたスミレが目細めてアヤメを見る。

「スミレちゃんは気にならないの?王子様が異国の姫と楽しそうにしてるのがっ!」

「…え、うん」

スミレは、気になるというのはどういふことかと考えた。とりあえず、シロを思い出してみる。

「う…っ」

だが思い出すのは昨夜のシロの寝顔とそのあとの苦しそうな表情。

そして、風呂上がりの色っぽいシロの身体…

「なな、ないない、忘れろ」

頭の中からシロのきれいな肌の色を追いつつと自分の頭を叩く。

「何やってるの？」

スマレの行動を冷たい目でアヤメは見る。

「…しかし、美男美女、絵になるわね！！お似合いすぎ！」
アヤメは話を切り替え、また、双眼鏡で外を覗いた。

確かに、二人がならんで歩く姿は世界が違つように感じる。

「でも…シロ様、ちょっと嫌そうでしたけど…」

「え？」

その瞬間、スマレはしまった、と口を塞ぐがもう遅かった。

「王子は行方がわからなかったはずだけど、スマレちゃん、会ったの！？」

「そうじゃなくて…えっと…その…」

「まさか…」

二人の間にしばらく沈黙が起こる。

「だからスミレちゃんからバラの匂いをするのね!!…どういふことなの!!? 白状しなさいよ!」

アヤメが好奇心いっぱいに瞳を輝かせながらスミレに迫った。

「ち、違うんです! これは私じゃなくて、シロ様が!」

「シロ様が? やっぱシロ様の香りなのね!!」

「あああのお! そうじゃなくて!!」

スミレは顔を真っ赤にしながら首を振るが、アヤメは目を細めスミレをじっと見つめた。

「…ふーん。どうも二人は怪しいと思ってたけど…まさか、まさかそこまでの仲だったとは…」

「違うんです!」

スミレはもう、その場にはいらなくなり駆け出そうと振り向いたとき…

「ぶぐっ!」

誰かにぶつかり、その人物の胸元に顔を埋めていた。

「ああ、すまん…」

「クロさん？」

そこには、いつもとは違う憂いを帯びた目をしているクロがいた。

「…何かあったんですか？」

スマレはそんなクロの表情が気になりすぐに問いかける。

クロはすぐにスマレを引き離し、静かに口を開いた。

「いや、なんでもない」

それだけ言うと、二人から離れ、どこかに歩いていく。

「クロさん、どうしたのかな？」

スマレは何となく元氣のないクロの背中を心配しながら、見送り、アヤメに向き直った。

「カッコいい…」

アヤメの目はハートになっている。

「あの謎に満ちた雰囲気はクロ様の良さを引き立てるのよね…あゝ

お会いできて幸せ!!」

そう言いながらクロの去っていった方をいつまでも見ている。

「…はあ…」

スミレはアヤメの言動に返す言葉もなく、また、廊下の掃除を再開した。

「その話は確かか？」

「ああ、アズライトの張っている結界に微弱だが、反応があったようだ。『神堕ち』は確かだな」

街の外れの高台に二人の影が並んでいる。

「結界が反応か…まあ、翡翠の言うことだ、信憑性はあるか」

翡翠と呼ばれた男は、長身のスラッとした体格に、この街の魔導学校の教官服であるロングコートを靡かせ、優しい表情の中に厳しさを秘める瞳を聖なる大樹へ向けていた。

「時に、アイリス、怪我の方はいいのか？」

翡翠と一緒に立つのは街の様子を偵察に来ていたアイリス。

アイリスは街の状況をシロに逐一報告する役を担う、隠密である。

「ああ、もう、平気だ。あの時は私を救いだしてもらって、感謝している…」

アイリスは少し柔らかい眼差しになり翡翠を見た。

先の吸血鬼との戦いでアイリスを瓦礫から救いだしたのは翡翠だった。

「翡翠は学校へ…街へ戻り、アズライトと結界の力を修復してほしい」

「君は？」

「私はもうしばらくここで様子を見る。妖魔となり果てた神が街に現れるかも知れない」

「そうか…」

だが暫くしても翡翠は動かない。

「どうした？行かないのか？」

「今日はもう僕の講義はないし。修復にはアズがもう向かっているはずだよ。もうしばらく一緒にいよう」

「…心強い」

アイリスの素直な気持ちだった。

翡翠は魔導学校の教官である。

アイリスにすれば、頼りになる『純正団』のメンバーの一人。

同時に一緒にいて安心できる男、という感情も抱いていた。

陽も傾き二人の影が長くなる。

やがて、遠い大樹の方から黒い影がゆらりと街の方へ向かってくるのが見た。

「やはり来たか…」

アイリスがその影を睨み付ける。

「…歓迎。久々に腕がなるな。アイリス、王子に報告を」

翡翠の顔から優しさが消える。

その身体中から青い湯気のような魔力が、あふれだした。

「翡翠、無理はするな。すぐに戻る」

「ああ、待ってるよ」

翡翠はアイリスに笑顔を向け影の方へ歩いていく。

その背中を惜しむように、アイリスはその場から去った。

第2章？ 近づく闇（後書き）

いろんなカップリングが出来るところまで来ました（涙）

今後も登場人物たちの関係と物語を少しでも気にしていただけたり
など、思います。

お読みいただきありがとうございました！

第2章？ 嫌な予感（前書き）

引き続き、繋ぎの話です。妖魔の登場にさらにざわざわします。
笑）

第2章？ 嫌な予感

城内に保養地として作られている湖畔のベンチにシロとエリカは並んで座っていた。

特に話が盛り上がるわけではなく、揺れる湖面に映る夕日が静かに落ちて行くのをただ見ているだけ。

エリカはそれでも嬉しそうに次々とシロに話しかける。

だがどの話題に対してもシロは適当に相づちを打っただけだった。

例えば隣にいるのがエリカでなく別の、スミレとかなら何時間でもこうして時間を潰せる。

言い合いになるかもしれないがそれはそれで結構楽しいかもしれない。

そんなことを考えながら、シロは時が過ぎるのをじっと待っていた。夕日が沈み辺りが暗くなり始める。

「日が落ちてきましたね。寒くなります。そろそろ城内に戻りましょうか」

シロがしびれを切らし、エリカに話しかけた。

「もう少し…ダメですか？」

エリカは隣に座るシロの手の上にそっと自分の手を置き、真剣な眼差しでシロを見つめる。

そして心を決めたように口を開いた。

「我が祖国チュリアーナは気候と地形に恵まれ観光地として人々に愛されて参りました。私もそこが全てでいいと、このままあそこで

一生を終えるのだと思っておりました。ですが…」

シロの手を掴み両手でしっかりと握る。

「あなた様がはじめて私の前に現れたとき、この国よりも遥かに世界は大きく、その大きい世界を貴方は見ておられることを知りました。その時から、心を決めておりました」
エリカは一度うつむき、また顔をあげる。

「この国もろとも私はあなた様の一部となり、その肩の荷と一緒に背負っていきたいと…」

シロの真っ直ぐな瞳がエリカを見つめる。

今度はシロが口を開いた。

「あなたのお気持ち、光栄です。チュリアーナもとても素晴らしい国です…」
二人の顔が接近する。

ガサッ

「…誰だ」

シロが音のした茂みの方へ目をやった。
ゆらりと人影が現れる。

「アイリス…」

「シロ様!!」

アイリスは乱れる呼吸を整えながらシロを呼んだ。

「取り込み中のところ…申し訳ない。今すぐに純正団の派遣を!!
翡翠が!!」

その言葉を聞くなり、すぐにベンチを立ち、アイリスの方へと歩く。

「…『神堕ち』か？」

神妙な顔つきに変わるシロ。

「はい、大樹の方から一体。今、翡翠が一人で防戦しております」
アイリスも最短で事を告げる。

「翡翠先生が…」

彼なら防戦ではなく倒してしまうのではないかと思っただ、なんだから胸騒ぎがした。

「わかった。すぐに動こう。あれを頼んだ」

シロはエリカを指差す。

「え？」

状況がわからないアイリスを無視しシロはそのままエリカの元に戻った。

そして、その手を取る。

「急用ができてしまいました。私は先に城へ戻ります。あの者と、足元お氣をつけてお戻りください」

シロはそれだけを告げると、アイリスとエリカをその場に残し走り去っていった。

正確には押し付けたようだが…

「シロ!？」

置いてかれたエリカはあつという間のことで頭が切り替わらず、ただ、シロの走り去る後ろ姿を見ているしかなかった。

アイリスも、翡翠の事が気にかかるが、しかし、主人の命令は絶対。なるべく早く姫を城内へ連れていき、合流しようとする。エリカに手を差し出す。

「姫、城内へ。こちらです」

エリカの手を取ったとき、なぜか違和感を覚えた。

「？」

「何か？」

アイリスの微妙な表情の変化にエリカは眉をひそめる。

「いえ…」

とにかく今は気にしている場合ではないと、エリカの手を引き湖を

あとにした。

「あつ！！シロ様！？」

シロの新しいマントを大事そうに抱えたペリドットが城内を駆けるシロを見つけて声をかけた。

シロもそれに気づき、慌てて近づいてくる。

「『神堕ち』だすぐに出る。イキシア、オニキスを街へ向かわせてくれ。私も支度をしたら、出る。」

「え！エリカ様は？」

「アイリスに任せた、直に来る」

「…クロさんは？」

その言葉を聞いた瞬間、シロの背中から殺気が沸き上がった。

「あんなやついなくとも私が片付ける」

急にシロが不機嫌になる。

「…わかりました。シロ様、ご無事でお帰りください」

ペリドットはそう言うとシロに頭を下げ、二人は反対方向に駆けていった。

城内ではエリカの為に歓迎の晩餐が始まっていたが、シロの姿がない。

エリカは寂しそうに目の前の食事を見つめた。

「姫、すまぬな。口に合わなかったかな？」

王が落ち込んでいるエリカに声をかける。

「いえ、そのようなことは。…王子様はいつもあのようにご多忙なのですか？」

「うむ。…今この国の治安はやつの肩に懸かっておる。あいつは責任感の強い男だ。わかってやってほしい」

そう言う王は優しい微笑みをエリカに向けた。

「…はい」

王の気遣いが余計辛い気がして、うつむいたままエリカは食事を始めた。

城から続く長い地下道を駆け抜ける二つの影。
出口のひとつを見つけ外の風を受けた。

広がる視界。

街は夜の闇に染まっている。

街灯の明かりは全く当てにならない。

三日月の輝きが街の一角を映し出していた。

そこだけは、緑色の光が大きく膨らんでは消え、また新しい光が作られている。

「あそこか……」

「そのようじゃな」

「さすがは翡翠だ。あのような膨大な魔力を連続で使用できるとは……」

「人間にしておくのは惜しい男だ」

遠くの戦況を高台から見つめながら、『純正団』の団長イキシアと、オニキスが目を合わさず会話をする。

「翡翠がいれば助けは一人でよかろう。ご老体は帰ってお茶でもしてたらどうだ」

イキシアがあごを上げて言う。

小さいドワーフへの威嚇のつもりだった。

「何を言う」

そんなイキシアの言動など気にせず、オニキスはイキシアの前に出て走り出す。

「お前さんこそ、花園で一人、望郷に耽っておればよい！！先に行くぞ！」

オニキスはイキシアをおいてさっさと光の方へ向かってしまう。

イキシアは先を越されたことが癢に触りすぐに追いかける。

「…待て…」

イキシアは戦場の方を見ると何かを感じながら眉を寄せた。

「魔力が消えた…」

「まさか…」

その台詞にオニキスは立ち止まる。

一度イキシアを振り返り、また街の外れに目をやった。

しばらくしても何も起こらない。

ただ静かで真っ暗な闇があるだけだった。

「もう、終わったようだな」

「とりあえず見に行こう、わからないが何か嫌な予感がする」
今度は二人揃って、暗闇に向かい走り出した。

街の外壁は一点だけ大きく破壊され、外には無数の攻撃の跡。
力と力のぶつかり合い、その戦いの厳しさを語るようだった。

そして、外壁の崩れた瓦礫の中に倒れている人影を見つけたのは、
地下通路を知りつくし、いち早く戻ってきたアイリスだった。

「翡翠!!」

アイリスは慌てて翡翠に駆け寄り抱き起こす。

「聴こえるか？何があつた？」

まさかと思える状況にアイリスは声を荒げた。

「ん…」

その切なる声に反応したのか、翡翠の指が軽く動き、意識を取り戻す。

しかし、魔力の消耗が激しいらしく立ち上がれない。

「調子に乗ったようだな」

アイリスに笑いかけるが、表情には悔しさが浮かぶ。

「あいつら…」

「…『あいつら』だと！？一体ではなかったのか？」

「ああ…僕としたことが…一体はだいぶ手負いにしたが、もう一人はとんでもない力を…皆に油断しないよう伝えて欲しい」

「しかし、お前を置いては…」

アイリスはためらいの眼差しを向ける。

それに気づいた翡翠は優しく笑った。

「大丈夫…。ちょっと休ませてくれ。君にあつたら元気出たよ、す

ぐ合流する」

そう言うとアイリスの手を握る。

「シロ様を、頼む」

「…ああ」

アイリスは立ち上がり、ここからは見えない妖魔を探しに街へと走っていった。

第2章？ 嫌な予感（後書き）

何があつたかは…

翡翠先生とアイリス気になります。

次話、奴が動き出します（汗）

ご一読いただきありがとうございます！

第2章？ 瞳の警告（前書き）

そろそろ2章も終わりが見えてきました。
ここで新展開が！

今回は大切な話となっております。
是非ともご一読ください！

第2章？ 瞳の警告

「あのおゝこんなこととして、何かあったらどうすればいいのですか……」

暗闇の中、一つのランプの明かりだけを頼りに、二つの影が並んで歩いている。

「ただ大丈夫ですわ！！コソツと覗くだけですから！！あなたは黙って付いてくればいいのよ！！」

「……はい……姫様」

スマレとエリカの意外な組み合わせの二人は、街へと続く城の地下道を出口と思われる方へ進んでいた。

いつまでも続くと思われた長い一本道の途中、ひんやりと冷たい空気に変わる。

「外が近いようね」

「……」

「なんか喋りなさいよ！！」
エリカが声を上げると、甲高いその声は冷たいコンクリートの壁に反響する。

前を歩くスマレの肩が驚きで持ち上がった。

「黙れとおっしゃったのに…」
不服な顔も暗闇で見えない。

「じゃあ、私からお話しましょうか」
エリカが突然話を切り出した。

「話ですか？」
スミレは前に進みながら首をかしげる。

「ええ！あなたはシロの何なの？」
エリカからはやはり直球が飛んできた。

「えっ？…えっとお城で働かせてもらってる、ただのメイドと王子さまと…」
あまりにストレートな質問に何故かスミレは赤面し、あたふたしてしまふ。

「ふ〜ん？ただのメイドがシロとあんな…感じに…」
エリカの視線はスミレを突き刺している。

「あの、あれは…」
今朝の事はやはりスミレの心臓を跳ねさせた。
言葉が出てこない。

そんなスミレの反応にエリカは更に怒りを募らせる。

「やっぱり！一つ言っておくわよ！シロは私のものになるんだから、

もう気安く近づかないことね！」

「え？」

スミレには弁解もそれに対する返事もすることができない。

しかし、なぜだか、胸にチクリと棘が刺さった気がした。

やがて入ってくる風も強くなり、闇の中に三日月がぽっかりと浮かんで見える。

出口を見つけると、二人ともが早足になった。

そして、地下道を抜けたその先には、よく知っている人物の背中。

「シロ！見つけましたわ」

「！！」

そこには白い髪を風に揺らし、暗闇に溶ける衣装をまとったシロの姿があった。

エリカの声に気づき慌ててこちらを振り返る。

エリカは即座にシロの方へ駆け寄り驚きで硬直した体を抱き締めた。

その衝撃で我に返り、目をつり上げスミレに向かって怒鳴る。

「どう言うことだ！！」

「すみませんっ」

二人の後ろで成り行きを見ていたスミレはその剣幕に目を瞋り小さくなる。

「私がお願いしましたのよ。シロとあの様な…関係にあるものであれば城を抜ける手立てを知っているかと思ひまして…」

つまり、シロとの関係をばらされなくては私をシロの向かった街へ案内しろ、と脅されたようだ。

「なぜ来たのですか…」

シロは困り果てた顔をエリカに向ける。
そしてエリカからさりげなく体を離れた。

エリカはしっかりとシロを見る。

「あなたの全てを知りたいからです」
帰る気がないことを告げる。

「今は妖魔が徘徊しています。危険です…」
わがままな子供を諭すようにシロはエリカの顔を見る。

「明日には、きっと安全になっていますわよね？街に連れて行ってくださいますか！？」

「…わかりましたから…」

シロが、ため息混じりに降参した。
エリカの思いが一枚上手だったようだ。

「よくここがわかったな」

シロはスマレに向かって言い捨てる。

すぐにエリカが口を挟んだ。

「匂いですわ！！王子の芳しき香りは私をあなたの元へ誘います。
今朝もすぐに見つけましたから」

一瞬シロとスマレは目と目が合う。

だがスマレは先ほどの出来事を思い出し、気まずさで目をそらした。
スマレの反応に不満そうな眼をしたが、シロは考え込むように眉を
寄せ、エリカに向いた。

「ちょっと、お聞きしたいのですが…」

「なんですの？」

「今朝はあなたが私の居場所を突き止めたと？」

「ええ…」

「…私の従者に案内されたのでは？」

「そんなわけありませんわ！！私はあなたのいる場所はすぐにわかりましたもの」

「じゃあ、一緒にいたのは…」

「あの黒い髪の殿方ですか？部屋に入るのを止められましたけど…」

「…なんと言うことだ…」

シロの表情が落胆の色に変わる。

「そう言えばクロさんが居ませんね」

スマレがあたりを見渡しながら首をかしげる。

先ほどの、なんだか切ないクロの背中を思い出した。

「クロさん、落ち込んでいたようでしたけど、シロ様、また意地悪なことでも言っただんですか？」

その言葉にシロは無言でスマレに背を向ける。

やがて口を開いた。

「お前な…まあいい…城に戻ったらクロを呼んでくれ…私の元にすぐに来るようにと…」

それは命令ではなく懇願するような口調だった。

何があつたのか、今朝のことに関係があるのではないかと、スマレは不安になる。

しかし、それを訊ねる事は出来なかった。

「頼んだぞ、…スマレ」

そう言うときシロは街の中へ向かって歩き出した。

「はい！…え…今、私の名前よびました！？ねえ、シロ様？」

「うるさいやつだな！！早く行け！！」

シロはそのまま駆け出して行ってしまう。

スミレは、突然シロに自分の名前が呼ばれた事が恥ずかしく、そして、嬉しかった。

エリカはスミレを睨み付け、いかにも不機嫌な表情を浮かべるとスカートを持ち上げた。

「あなたには負けないんだから！！」

そして、スミレを見下ろし、歩き出した。

朝の件を試すつもりで、スミレを連れ出しシロとの仲を見せつけようとしたようだ。

しかし、逆に二人の関係をより知ることになってしまう。

「あの…帰りはこっちですけど…」

スミレはそんなエリカの言動の意図は全くわからず、ただ、シロやクロの落ち込んだ背中が気になり、すぐに城へ戻らなければいけない気がしていた。

「言ったはずよ、シロの全てが知りたいと…」

迷うことなく夜の暗がりの中へ歩みを進めるエリカ。

追うべきか、クロを呼びに城へ戻るべきか…

エリカの後ろ姿を見つめながら必死に考えるが、スミレの足はエリカの背中を追うために地下道の入り口から反転していた。その足音に、エリカは、苛立ちすごいスピードでその場を駆け出す。

「姫様！待ってください…」

突然、スミレの周りが明るくなり瞳に痛みが起こる。

「えっ」

瞳が何かに反応して輝き出したのだ。

「素敵…」

路地裏から何か細い棒のようなものが、カッンカッンと地面を突くようにゆっくりと近づいてくる。

それはピンヒールの音で、目を細めてそちらをよく見るとオリーブのような妖艶な体をくねらせ肌の露出の多い服を着た女がそこから姿を現した。

真っ黒な髪にスパツと揃えられた前髪。

一つに束ねられた長い髪が揺れている。

そしてその瞳は感情のない冷たさを湛えていた。

しかし、楽しそうに口元だけが上がっている。

「初めまして…」

周りを凍りつかせるような声でスミレに話しかけてくる。

この女は人間ではないと、スマイレの全身が警笛をならす。

女が近づく度に見えない力のようなものに押され、スマイレは後ろへ下がる。

「誰…」

危険だと解しながらも、勇気を出して口を開く。

「ふふっ」

女はやはり嬉しそうに笑う。

「怯えなくても良くてよ。わたしは妖魔なんて下等な生き物ではない。だけど神でもない」

寒さのせいではなくスマイレの体が震えだした。

「落ちてくる神様に混じってこの世界に來ただけよ。目的は…王子とあなた」

女の長い爪がスマイレを指差す。

「…それと…」

スマイレを見ていた女は、目線を少し横にずらした。

「出てきなさい。シロに命を預けし者よ」

女の視線の先は地下道の入り口の方へ向いている。

その影から静かに一人の男が姿を表した。

「その娘から離れろ」

「クロ…さん？」

全身に殺気を浮かべ刀の柄に手を乗せたクロが一步前に出てきた。

「その眼差し、いいわね…」

女はクロに対して全く怯まない。

「大丈夫。私はなにもしないわ。シロが契約を守る限り」

女の歩みがスマレの前で止まる。

スマレはすでに壁に背中が当たり、身動きがとれない。

下手に逃げることもできないほどの力が女から滲み出ている。

「シロも欲しい…だけど、あなたのソレはもっと欲しいわね…」

女がスマレの輝く瞳を見つめ、顔に手を伸ばしたその瞬間。

女とスマレの間に激しい閃光が走った。

「そうね、貴方も欲しい」

二人の間に距離ができる。

銀色に光る刀を構えたクロがスマレをかばうように間に入っていた。

「お前は何者だ」

鋭い眼光で女を睨み付けるクロ。

「そんなものでは私は斬れないわ」

女はニヤリと笑いながら後ろを向いた。

「シロのために落神をたくさん斬りなさい」
顔だけを向けクロを見つめる。

「シロ様のためだと？　どういうことだ……」

クロの問いかけには答える様子もなく、また後ろを向き歩き始める。

「しばらくはそれで許してあげる。ほんとに今日は遊びに来ただけよ。あ、来るついでに邪魔だった魔導師を一人いじめちゃったけど、殺してないから許してね。あとはあのでっかい落神を倒すだけだから。……よろしくね」

その言葉には感情がなく、それでもなぜか楽しそうに歩きながら、女はあっという間に闇に消えてしまった。

スマレの瞳の光は治まり、クロの表情は困惑に曇っている。
二人ともが狐につままれたような気分になった。

スマレがクロの着物の袖を掴む。

「シロ様の、『契約』って？」

「…わからない…」

スマレの脳裏に昨晚のシロの苦しむ顔と胸の紋様が浮かんだ。

だが同時にそれはスマレが触れていいものではない気がした。

シロが抱えるものが想像を越えているようで胸が締め付けられる。

クロはもう何も語ろうとせず刀を鞘に納め、何かを考え込んでいるが、スマレと同じことを思っているようだった。

やがてクロが口を開く。

「このことは口外無きよう頼む。さて、シロ様と…お姫様を追わなければ…」

そう言うときスマレを一度見て、その手を握んだ。

「お前も来い」

そう言うとき、エリカが消えていった道の先へ二人は走り始めた。

第2章？ 瞳の警告（後書き）

繋ぎを越えて新展開です。

シロ様どしたの？そう思っていただけばいいのです。

次回は、ちよつと戦闘シーンを織り交ぜ展開していきますので更新を心の片隅でもお待ちいただければ幸いです。

ご覧いただきましてありがとうございます。

第2章？ 不器用王子（前書き）

第2章もラストスパートです。

新たな出会いがスミレたちに混乱をもたらします。

さて、シロ様、ちゃんと仲直りしてください！

戦闘回、どうぞご覧下さい。

第2章？ 不器用王子

「でかいつてのは羨ましいな」

余裕の表情でオニキスは自分の体ほどもある大きな斧を振るう。

「自分にないものを求めるのは悪いことじゃない」

風のように空に舞いながらイキシアが言った。

尖った剣の先端が妖魔の胸を一突きする。

二人の連続の攻撃に、妖魔の雄叫びが街に響いた。

手足を大きく振り乱し暴れる。

「あんまり派手に動かないでくれ、街が壊れる……」

二人と妖魔の動きが見えるところにいたシロは、ため息混じりに声をあげた。

「大丈夫ですよ。この辺は僕の結界を張ってます。お二人とも思う存分暴れてください！」

一人の男がシロのとなりで笑顔を浮かべながら叫ぶ。

イキシアとオニキスからは、簡単な返事が帰ってきた。

「アズライト……」

肩ほどの長さのある髪を後ろに束ね、笑顔を絶やさないアズライトは、いつの間にか手に数枚の護符を掲げている。

「僕も援護します！」

そう呟くと護符を妖魔に向かって投げつけた。

勢いよく飛んだ数枚の紙切れが妖魔の体に当たるとそこから激しい爆音と煙が上がった。

煙が去ったあとには所々爆発で失った妖魔が今にも倒れそうに大きく揺れる姿。

だがまだ、大ききゆえかそのまま立ち続けていた。

「さてと…」

シロが一旦目を伏せ、夜の冷たい空気をゆつくりと吸い込む。

「寄り道せず、ただ堕ちれば善かったものを。深淵へ堕ちろ」

シロが両手を前に押し出しながら目を瞑ると、体からエネルギーが真っ白い湯気のようにゆらゆらと沸きだしその体を包みだした。

それは手のひらに集まり始める。

いつの間にかシロの前に大きな魔方陣が描かれていた。

ほんの少し、シロの呼吸が乱れる。

しかしそのまま、体から溢れる気を円陣へ集中させた。

背後から計り知れない力を感じたオニキスがシロを見る。

「出るか、シロ殿の『禁忌魔術』」

果てしなく大きく膨らんでいくシロの力にその場の全てが動きを止める。

「無理をなさる…」

「若いもんは暴れたくなるものだ。さて、離れるか」
妖魔の前からオニキスとイキシアは走り去った。

痛みで暴れる妖魔だけになると、円陣は妖魔に照準を合わせるようにさらに大きくなる。

その時、バタバタと走ってくる靴音が二つ聞こえ、その一つはあつという間にシロの脇を走り抜けた。

瞬間にシロの肩に手が置かれる。

「オレが斬る」

それだけ囁くと、声の主はシロの円陣を飛び越えて妖魔に飛びかかった。

まるで三日月がもうひとつあるかのように剣先から放たれた放物線は、巨大な妖魔を真つ二つに切り裂く。

妖魔はぐらりと一度揺れると、黒い灰となりさらさらと夜の闇に溶けていった。

同時にシロの円陣は弾け、消えてなくなる。

シロは息を切らしながらその場に膝をついた。

「シロ様!？」

アズライトがシロを支え、スミレが横から顔をだし、シロを覗き込む。

「大丈夫ですか？」

スミレの瞳が呼吸を整えるシロの体を照らした。
だがシロを照らすその光は優しい。

「スミレか…早かったな…。平気だ」

シロはアズライトの腕から離れしつかりと立つと、膝をはたく。

「クロさんは、私が呼びに行く前にもう来てましたよ…」

その言葉にシロは軽く顔をあげた。

そして、ゆつくりとこちらに戻ってくるクロの方を見ながら、少しだけ口元を弛ませる。

「そうか…」

「クロさんから聞きましたよ！！ちゃんと仲直りしてくださいね」
スミレはシロの背中を思いつき叩いた。
その拍子にシロは倒れ込みそうになったがクロが抱き止める。

「痛い！！覚えておけよ！」

シロは支えるクロを無視し、スミレに向かって言葉を投げつけた。
それは目の前にいるクロへの、照れ隠しのように見え、スミレはアズライトと軽く笑い合う。

「シロ様…」

やがてクロがシロに向かって小さく呟くとシロは眉を潜めクロの方

を向いた。

「な、なんだ…いつの間に来ていたのだ…」
クロから離れ偉そうに顎を上げるシロ。

「言いつけを守らず。申し訳ない…」

クロが頭を下げた。

主に忠実で、だが時として、護るべきものを護るためには拘束さえ破り駆け付ける。

下がっているクロの頭を見つめながらシロは何も言えなかった。
小さなことで、叱りつけた自分が情けない。

そして、シロはクロの頭をバシッと叩いた。

その光景を見ていた全員が口を開けてしまう。

「あ、当たり前だろう！！お前は私と共にある。離れてはならない！これからもだっ」

わがままな話だがそれはシロの精一杯の言葉だった。

だが、はたかれたクロは頭を下げたままさらに深くお辞儀をする。

「素直じゃないんだから…」

スマレは聞こえないように気を使いながら、それでも小さく呟いた。

「さて、皆さんに質問なんだけど…」

突然、アズライトが手をあげて声を出した。
その手は壁際の一点を指差す。

「あれ、何ですか？」

その指の先には壁にもたれ掛かり、気を失っているエリカの姿があった。

「あ、忘れてた…」

「誰だ、あれ？」

「なんだオニキス知らぬのか。あれはシロ殿の妃となるものだ」
「それはない」

「しかし、先程までうるさく、騒いでいたようだが…」

「『禁忌魔術』って便利ですね」

いつの間にか、アイリスがそこに立っていた。

そして、今度はシロに全員の視線が集まる。

「き、気をちよっと掴んでやっただけだ。今回の事も、記憶の操作で何とでもなる…」

一同に若干冷たい視線を送られシロはふてくされながら白状した。

「だ、大丈夫ですかね…なんか意識跳んじゃってる感じですけど…」
スミレがエリカの顔を覗き込みながら呟く。

「シロ様、禁忌は禁忌です。使い方を間違わないようにしてください」
「い」

アイリスが呆れ顔を向けた。

「そう言えば、翡翠はどうなったんだ？あんなやつ簡単に葬れただろっに」

アズライトがきよろきよろと辺りを見回す。

「それが…翡翠は深手を負い北の門付近で動けないのだ。いまは妖魔の気配はないが…、翡翠は『あいつら』と言っていた、まだ敵はいるはずなんだが」

「先生が？」

シロが眉を寄せ、その言葉を疑うようにアイリスに問いかけた。

アイリスの話からスマレは先程の女を思い出す。

しかし、顔に出さないように気を付け口を結んだ。

クロの方を見るとクロもスマレを見ている。

お互い先程の出来事は知られないようにと、視線を交わす。
やがて、クロが一步前に出て、口を開いた。

「実は…」

「クロさん!？」

スマレはクロの会話を遮ろうとしたが、クロはスマレの肩に手をのせ呟くように言った。

「ここに来る前に一体斬った。翡翠が傷を負わせていたようであっけなかったが…」

「そうだったのか…」

イキシアの表情が柔らかくなり、みな納得の表情を浮かべる。

シロ以外。

「それではこれで解決かな!!」

アズライトが小さな水晶を出して地面に打ち付け割った。

同時に真上からヒビの入る音が聞こえ辺りの空気が破裂すると街が元通りになる。

戦闘用の結界を壊したのだ。

「じゃ、僕はアイリスと翡翠の救護に向かうよ」

「頼んだ」

アズライトはアイリスと並んで走り去っていった。

「さて、ワシも帰って寝るかな」

オニキスも揚々とどこかへ去っていく。

「シロ殿、お幸せに」

イキシアが意地悪な顔をシロに向け、去る。

シロとクロ、スマレと気を失っているエリカだけがその場に残された。

第2章？ 不器用王子（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございました。

シロ様かわいいです。

クロは頼もしい。

そこだけ汲んでください…

さて、次回はとうとう第2章最終話です。

エリカとの関係は？契約って？
気にしていただければ幸いです。

第2章？ エリカの告白（前書き）

第2章 最終話です！

謎の女に出会ったスミレとクロ。女の正体とは？

シロの契約とは？

それでもって、エリカの秘密とは？

どうぞご覧下さい！

第2章？ エリカの告白

夜の街に突然現れた妖魔を撃退し、『純正団』の皆がそれぞれの場所へ解散すると、クロがエリカを背負った。

「公になる前に姫を戻しましょう」

「そ、そうですね！！」

スミレもクロに着いていく。

「ちょっとまって…」

シロが普段よりも低い声で二人を引き留めた。

スミレの肩は跳ね上がり、クロも歩みを止める。

「お前たちは何を隠している？」

シロは腕を組みあごをあげ二人の様子が気に入らないといった視線を向ける。

クロがシロに向き直ると、その瞳はシロを真っ直ぐに見つめた。

「シロ様は…悪魔と知り合いですか？」

突然、核心を突く言葉がクロから放たれた。

驚いた顔をしたのはスミレだけだった。

シロはその台詞が出ることをわかっていたかのように表情を変えな

い。

「…ああ」

シロからの返事を聞き、クロは緊張が解けたのか続けて話した。

「女に会いました。妖魔でも神でもないと言っていた…深淵の者…ですね。スマレの手前、このタイミングで話すのは悩みましたが」

スマレはクロが何を言いたいのかわからない。

やはり、自分は部外者なのか。

なんだか寂しさを感じた。

しかしクロは憂いを帯びた目で一度スマレを見ると、またすぐにシロへと視線を戻す。

「そうか…」

やがて、ため息混じりにシロは口を開いた。

「それは深淵を司る女王クレマチスだな…彼女は何と言ってきた…平静を保っているようなシロの表情。

だが、その眼差しはどことなく落ち着かない。

「あなたが『契約』を守る限り我々にはなにもしないと、スマレと…俺に興味があると…もう我々は無関係ではない…」

シロの顔が一層曇る。

スミレを見る目の中になにか揺らめきのようなものが見え、すぐに目が伏せられた。

「あいつ…」

シロは俯きながら小さく呟く。

それは怒りを抑えた声だったのか、なにかに怯えた声だったのかはスミレには解るわけもなかった。

「う…ん」

幸せな夢からエリカは目が覚めた。

冷たい地面ではなくここは誰かの背中の上。

その背中が温かく、大きく、安心できる。

起きてしまえばこの温もりが消えてしまう。

しばらくは、不本意だがこの背中に甘えていよう。

後ろからは愛しいシロの声。

だが、もうひとつ気にくわない声。

『今朝の事』

この二人の関係は？気にすればするほどこの二人の距離が近づいていくような気がする。

とりあえず今は、三人の話に耳を傾ける。

「…『契約』ってなんですか？」

冷たい地下道を歩きながら、声を落としてスミレはシロに訊ねた。

「…」

シロは答えない。

変わりに、ため息がひとつこぼれた。

やがて小さな声でシロは呟く。

「俺はクレマチスと契約し、『禁忌魔術』を手に入れたんだ」

誰も続いて話す事が出来ない。

クロはなにかを訪ねようと言葉を探す。

しかし考え込んだまま口を開くことができずにいた。

その中で、エリカは自分の心音が高まるのを抑えようと小さく呼吸をする。

静寂を破ったのはスミレだった。

足を止めシロに向き直る。

「シロ様、答えになってません。もう一度聞きます。『契約』ってなんですか？」

「お前…」

スミレはシロを睨むように見つめる。

シロは驚きながらそんなスミレの瞳を見た。

そして諦めたように一度天井を見上げ、深くため息をつく。

「対価を払い、それに見合った力を享受される事だ。俺の『禁忌魔術』は悪魔の力…」

「シロ様…」

クロが話を遮るように言葉を挟む。

そして、背中にいるエリカに視線を送った。

「大丈夫だ。起きてるんだろうエリカ」

「ああ…」

クロの後ろに背負われていたエリカはそこから軽い動作で降りる。

「え？」

訳がわからないのはスミレだけだったようだ。

「声…」

そこには姿形はエリカに違いないのに、発した声に聞き覚えのない人物がいる。

「まさか、気を失わされちゃうなんて思わなかったよ…」

妖しい笑みを浮かべながらエリカはシロに近づいた。

「危ない!!」

「えっ!?!ぐあっ!!」

次の瞬間、エリカはスミレに突き飛ばされていた。
シロもクロもその光景に啞然とする。

「この人はエリカ様じゃないですっ！！きっと妖魔が姿を変えて私
たちを油断させよう」と……」

「待った待った……」

シロが片手で頭を押さえて完全にあきれ返っている。

「え」

「ほんとに、お前は……」

また、ため息をつくとき、倒れ込んでいるエリカに手を差しのべた。

「シロ……」

嬉しそうにシロの手をとるエリカ。

「シロ様！気を付けて下さい！！」

慌てるスミレの頭にクロの手が乗せられた。

「……お前の瞳は妖魔に反応するんじゃないのか？」

「あ」

「ほんとに騒がしい女だな」

間を置くと、スミレの頭に後悔の念が押し寄せる。

「も、も、申し訳ありませんでした……」

エリカに向かって勢いよく頭を下げる。

「許しませんわ」

今度は聞き覚えのある声でスマイレを戒める。

四人はまた暗い地下の中を歩き出していた。
響く足音が賑やかになる。

「もう少し…クロ君だっけ？君の背中に甘えてたかったんだけど…」
「遠慮します」

余計な部外者の登場で話が途切れた。

シロはほっとしたようだったが、エリカが急に話しを始める。

「私は無関係じゃない。なんせ、クレマチスとシロの仲を取り持ったのは私だから…」

一同がエリカに目を向ける。

「おい…」

シロがエリカを睨んだ。

「シロ、国を守るために力が要る。君はそうだった」
構わずエリカは静かに話す。

「エリカ。もういい」

シロがエリカの腕をつかんで小さな声で話を止めた。
しかし、エリカは話をやめない。

「例え命に代えても…」

「エリカッ！！」

シロの怒鳴り声が暗い地下に響き渡り、それ以外の音が消える。

「シロあなたの力になりたいの！！」

突然エリカがシロを抱き締めた。

「エリ…カ！？」

思いがけないエリカの行動にシロはまた動けなくなる。

エリカの話にも付いていけず混乱する頭でスミレは目の前の光景の意味を懸命に考えた。

そして、シロがそつとエリカの肩をつかんで体を引き離す。

「エリカ、先程も伝えたが君の気持ちは嬉しい。だがこれは俺の問題だ。君の大切な国まで巻き込みたくはない。それはこれからも変わらない」

軽蔑する眼ではなく、優しい眼差しでシロはエリカを見つめた。

「シロの大バカ！」

エリカがシロの胸元を何度も叩く。

シロは抵抗しない。

「あの頃からずっと…シロの力になろうって！！シロを見守って行こうって思ってたのに！！」

「…」

エリカの痛切な叫びにシロは佇むだけだった。

「あの…申し訳ないんだが…」

シロとエリカのやり取りに、クロが割って入る。

「ク、クロさん！？いまはちょっと…」

さすがにスマレもこの場面での割り込みは危険と判断し、クロの腕を掴み引き留めた。

「すまん、気になることが…」

すると、スマレに対して神妙な顔を向ける。

「な、なんですか！？」

「いや、結婚とは同性でするものだったか？」

「は？」

「周りではシロ様とエリカ様の婚約なんだかんだと言っているのだが、男同士でするものだったかどうか思い出せなくてな…なんか違和感があるんだが…」

「クロさんの言っている意味がわかりません！シロ様…！？」
両手で頭を抱えシロに向き直るスマレ。

だが、その先ではシロが胸を抱えてうずくまっていた。

「もー我慢ならぬ!!」

叫びながら立ち上がったシロはエリカの頭に容赦なくヘッドロックをかける。

「いだーっい!!」

「シロ様!! なんと言うことを!!」
即座に止めに入るスミレとクロ。

「離せ!! 馴染みのよしみで黙って我慢していたが!! 強く叩きすぎだ!! 加減をしろ!! バカ力め!!」

シロの怒りは収まらない。

「男の力で殴られれば痛いでしょうね…」

暴れるシロを後ろから押さえているクロが呟いた。

「さっきからクロさん、なにを…キヤー!!」

スミレの目の前でエリカの長い髪の毛がバツサリと落ちる。
金髪で短髪の少年が汗を垂らしてスミレに微笑みかけた。

そして、スミレの意識はそこでぶつつりと切れた。

「命に代えても…」

エリカの声が頭の中に響く。
そしてその後のシロの表情。

どこかへ行こうとしているのに邪魔をされたような…
でも、その『どこか』には行かせたくない…

遠くへ行かないで欲しい…

「だめです!!」

目を開けると視界には見慣れた天井。
周りを見るといつもの部屋。
微かなバラの香り。

「あ、目、覚めた？」

そこにはアヤメの笑顔があった。

「アヤメさん…どうして？」

自分の状況が理解できずスマレは混乱する。

「どうしてって、夜中にクロさんが急に来て、スマレちゃんを置いて行っちゃったの」

なんだか嬉しそうに、アヤメが話した。

「え、私何して…」

昨晚のことを思い出す。
一番新しい記憶。

「髪の毛が!!」

「なに!?!」

「バサって金髪がエリカ様の!!」

「大丈夫? 頭打ってるみたいだから、今日は休んでいいって」
「アヤメは優しく気遣いながらスミレの顔を覗き込んだ。」

「混乱してる...」

「なんだが、たくさんの大事な話をした気がする。
だが全てが煙に巻かれたような。」

「頭以外は元気そうだし、私は仕事いなくちゃ。...平気?」

「ありがとう。大丈夫です!!」

その言葉を聞くと、アヤメは部屋を出て行ってしまった。

そしてその直後にまた、部屋のドアが開いた。

「忘れ物?」

「え!?!」

「え...?」

そこにはスミレの混乱の原因を作ったエリカが部屋を覗きこむ姿があった。

髪の毛はちゃんとある。

「な、なによ...」

スミレの知っているエリカの威張り方。

「エリカ様...どうされたんですか? シロ様はこちらには...」

「な、シ、シロは関係ないのよ！どうなのよ！！」

「なにがですか？」

「なにがつて！！あなた急に倒れたでしょ！！」

「もしかして…心配してくださって！？」

エリカが顎をあげながらスマレを見るが、ほほが少し赤い。

「元気そうね！！じゃあいいわ！！」

そついうと、すぐにスマレに背を向けドアの方へ向かう。

「待ってください！」

スマレが呼び止めると、エリカは動きを止めた。

「わ、私は…」

エリカは言葉を詰まらせながらも何かを話そうとする。

「シロ様をお願いします！！」

思いがけないスマレの言葉にエリカは振り向いた。

「何言ってるの。あなた記憶までなくなったの？私はあるときシロに…」

瞳に涙を浮かべながらエリカはスマレに近づく。

「エリカ様ならきつとシロ様を捕まえておけます」

「え？」

「シロ様が遠くへ行ってしまうようで…」

「あなた…」

伏せられたスマレの顔をエリカの両手が包む。

その掌は意外に大きくてスマレは驚き、目を見開いた。

「私、男よ」

エリカはニツコリと微笑み、まっすぐにスマレを見つめる。

「最初から叶わない願いを押し通すのはもう辞めたわ。完全に否定されたし…」

悔しそうな表情が一瞬だけ浮かんた。

「え、男…！？」

全ての話が今やっと繋がった。

スマレの白黒する瞳を見ながらエリカは笑う。

「ふふっ…あなたが倒れたときのシロの顔ったら面白かったわ。あんなに心配そうな顔、初めて見た」

スマレの顔から手を離し、エリカは顔をスマレに近づけた。

「シロを捕まえておけるのは私じゃないわ」

エリカの指がスマレのおでこを弾く。

「認めたくないけど…」

エリカの顔が、女性の顔から凛々しくなる。

「シロを頼んだぞ」

スミレの頭に手が置かれたが、それはすぐに離れた。
そしてエリカはドアに向かって歩き出す。

「エリカ様…」

「鈍感もいい加減にしないと…俺が襲っちゃうぞ」
エリカはスミレに向かってウィंकをひとつし、意地悪な笑顔を向けると背を向けてすぐにドアを開けた。

「じゃあね」

手を振りながらドアを閉める。

「…どういうこと!？」

またいくつかの謎がスミレの頭を駆け巡っていった。

その日エリカはウェンダブルと友好関係を持続し、支援を続けると誓約書を交わし国を去っていった。

見送りを済ませたシロは、大きなため息をまたひとつつきながら、城内の廊下を歩いている。

「残念でしたね」

ペリドットの一言にシロは眉間にシワを寄せ睨み付けるが、何も言わずに足早にその場を立ち去ろうとした。

「シロ様!!」

そこに息を切らせたスマレが駆け寄ってくる。

「お前…」

「エリカ様は？」

「いましがた見送りを済ませた」

「そうですか…」

何か言いたげなスマレの脇を、シロは何も言わず横切ろうとした。スマレは慌ててシロの服の袖口を掴まんで引っ張る。

「ん？なんだ文句があるのか？」

怪訝な顔でスマレを睨み付ける。

「シロ様…急にいなくなったりしませんよね？」

スマレの思いがけない一言に表情が変わる。

「ああ…」

シロは目を合わせず一言だけ告げると、その脇を歩いて去っていった。

第2章？ エリカの告白（後書き）

このまま第3章へ突入…出来るのか？？

シロとスミレの関係もぐつと近づいたかな？という感じです。

第3章からはまたちょっと違った感じで話が進んでいくと思いますので、更新をお待ちいただければ、幸いです！

ここまでお立ち寄りいただきありがとうございました！

第3章？ 災いの訪れ（前書き）

とうとう3章突入です。

新キャラくんは少年！そして、クロの過去に迫る
第3章どうぞよろしくお願いいたします！

第3章？ 災いの訪れ

目の前は鮮血に染まる真っ赤な海。

その上をチラチラと何かが舞っていた。

手を伸ばして掴もうとしてもすぐに消えてしまう。

目を閉じる。

真っ暗な闇がそこにはあった。

その真っ黒な世界にどこまでも堕ちて、やがて潰されてしまう気がする。

迫る闇の恐怖を振り払おうとまた目を開けた。

そこには親しみのある顔が浮かぶが、はっきりとは見えない。

「あなたは…」

その人影に抱き締められた。

体から伝わる温もりに身を預ける。

力が抜けてゆく…

「起きてください」

体を揺すられゆっくりと目を開ける。

そこは夢の中とは離れた現実の世界。

ボンヤリとした視界が続いたが、こいつが来たからにはよくない知らせに違いないと、顔を向ける。

「…ペリドットか」

「クロさん!!何か悪い夢でも見てたんですか?うなされてましたよ。それに僕が来たのになかなか起きないなんて珍しい」

確かにあの夢はクロの全身を縛り付けるようだった。

深い眠りにつかされていたのだろう。

体を起こすが、ずしつと重たいものがまとわりつく。

「で、妖魔か?」

「ご名答!!シロ様が先に向かわれてますよ」

「!!」

その言葉を聞くなりクロは体の重たさを忘れ、布団から飛び起き刀を掴むと、ペリドットを無視するように部屋を飛び出した。

「今回は落神ではないようです。お気を付けて!」

後ろの方でペリドットが叫ぶが、クロはあっという間に遠くへ走り去る。

「シロ様をお願いしますよ」

どこか遠くを見つめてペリドットはクロの背中に呟いた。

「シロ様!!」

「クロ…」

あつという間に地下道を抜け街へ出る。

その出口には黒いロングコートを風になびかせ街を見下ろすシロがいた。

まだ、力を使っていないようでクロは安心する。

「どうか俺に任せてくれ」

懇願するように一言呟くと、クロはシロの前に立った。

「お前…」

クロは見晴らしのいい高台から街を眺め、目を瞑る。

一角で魔力の高まりを感じた。

「翡翠か…」

「ああ、まだ回復しきつてないのに…」

シロの言葉も半ばにクロはすぐに現場へ駆け出した。

その脳裏には深淵の女王クレマチスの言葉だけが巡る。

『シロのためにたくさんの落神を斬りなさい。しばらくはそれで許してあげる』

意味ははつきりとはわからない。

しかし、シロにあの力を使わせてはいけないと心のどこかで警戒していた。

街の中で、ものすごい爆音が鳴り響く。

瞬時にまた魔力が高まる。

同じように何度も光の弾はある一点に撃ち込まれていた。

「俺がやる」

「クロ？」

クロの方を振り向いた翡翠の顔は疲弊しきっていた。

すぐに爆撃跡に向けて刀を構え突進する。

しかし次の瞬間金属同士のぶつかる高い音が響き、その手応えにクロは表情を歪ませた。

「貴様は……」

クロの刀と交わるもう一本の刀。

砂煙の中から姿を表したのは、額に鋭く伸びた角に筋骨隆々な肢体。そして手にはクロと同じく刀を携えた怪物が余裕の表情でクロの刀を受け止めていた。

クロの刀が震え出す。

刀と言うよりはクロ自身がその妖魔の容姿に驚きを隠せない様子だった。

「離れろ……！」

上空から声がすると同時に、数本のクナイが妖魔とクロの間を埋めるように地面に突き刺ささった。

「アイリスか」

支援したアイリスは間髪空けずクナイを妖魔に向け放つが全て刀によって打ち返される。

「なんなんだ、あいつは」

翡翠が手前にかざし魔力をためながら呟く。

「わからない、だが…」

知っている。

そう言おうとしたその時、目の前の妖魔は光の鎖で体を拘束された。

その体に食い込む鎖を力で振りほどこうと暴れる妖魔。
すぐにとどめを刺したかったが、クロの足が前に出ない。

「何をしている。お前の敵ではないはずだ。早く仕留めろ」

「シロ様…」

クロは妖魔に向かって一歩踏み出すと何かを吹っ切ったように刀を強く握り直す。
そして妖魔に斬りかかった。

「それでいい…」

妖魔の消えた戦場跡に静寂が訪れる。
クロはすぐにシロの元へ駆け寄った。

「シロ様…力を…」

「皆が戦っている。なにもしないわけにはいかないだろう」
余裕の表情のわりに肩を大きく上下させ荒い息づかいのシロにクロは返す言葉がなかった。

その静かな時間を打ち破るように、物陰から一人の少年が姿を表した。

「…助かったの？」

全身ボロボロの少年はふらふらな足取りでシロの方へ歩き出す。
そして手前にいたクロのもとで気を失った。

―置いていかないで。

目の前に広がる残酷な光景。

親しい人間の血にまみれた体がいくつも転がる。

目を閉じようにも体は震えて言うことを聞かない。

またなにかが斬られる音。

それもすぐ近く。

あいつがやって来た。

もう逃げられない。

息を潜めて恐怖が去るのを待つ。

しかし、ソレは目の前に立っていた。

額に伸びる二本の角。

血をたくさん浴びた着物。

真っ赤に染まる刀。

そいつの口許が上がり、高く掲げられた赤い液体の滴る鈍く光る刀が振り下ろされる。

「わっっ!!」

身体中の力を込めて叫び飛び起きる。

だが、想像していた世界よりも静かな風景が広がっていた。

「はあ……」

あの夢は少年の過去の記憶であることと自分の全てを思いだし、深く息を吐く。

「ここは？」

見慣れない部屋の中。

暖かい布団。

「目、覚めた？何か飲む？」

見たことのない少女がこちらに微笑みを投げ掛けた。

少年は警戒し、自分の護身用に携えていた刀を手で探る。

「はい、紅茶でいいかな？」

少年の警戒心など気にする様子もなく目の前におしゃれなティーカップが笑顔と共に差し出された。

少年は渋々それを受け取る。

「トパーズ先生は疲労とかすり傷くらいだからしばらく休んで美味しいものでも食べたらもう大丈夫だろうって！」

ティーカップを受け取り、はぐらかされた質問をもう一度した。

「ここはどこ？」

「お城の中の私のお部屋よ」

「城？俺は確か、一本角の『鬼』に出会って……」

「翡翠さんから聞いたわ、あなた、戦っていたらしいわね……こんなに小さいのに」

少女の手が少年の頭に伸びるのを少年はさつとかわす。

「小さいと言っな。これでも10歳だ。お前こそ小さいじゃないか」
「…なんか、どっかの誰かさんにてる…」

「？」

少年の瞳が少女の瞳を見つめる。

「お前、目の中に…」

はつとした表情をお互い浮かべた。

「虫がいるぞ…」

「えっ!？」

少女の不思議な瞳を少年は観察するように見つめる。

「あんまり見ないでっ」

少女の顔が赤くなっていく。

「君、名前は？私はスマレ。もうお前、なんて呼ばないのよ」

「スマレ…俺はジャスパーだ。どうやら救ってもらったようだな。
感謝する」

「なんだか、つくづくシロ様に似てるのね…どこかの王子さま？」

感心した眼差しをジャスパーに向けるスマレ。

「シロ…」

「このウェンダブル国の王子さまよ。無茶苦茶な人なんだけどね…」

「誰が無茶苦茶な人だって!？」

「！」

その声に振り返ると、そこには腕を組み仁王立ちしているシロが、眉間にシワを寄せこちらを睨んでいた。

「シロ様！！」

「ジャスパーと言ったな、お前どこからなんのために来た？」

「そんな威張って言われては警戒してしまいます！」

スマレがシロをたしなめる。

しかし、ジャスパーは立ち上がり、シロの前に行き膝をついた。

「和の国の小さな村から参りました。村を滅ぼした敵を探して旅をしています」

「…ほう。子供にしては礼儀を知っているようだな。スマレ、ジャスパーの面倒を見てやれ」

その態度にシロの表情が少しだけ柔らかくなる。

「私ですか？」

「そうだな、クロに剣術をならうといい」

「クロ？」

「お前と戦っていた妖魔を切り伏せた剣士だ」

ジャスパーは気を失う寸前に見た刀を持った一人の男を思い出した。

「敵を探す前に少しでも役に立つなら誰かに何かを習うのは悪いことではない。気に入らないのなら去ればよい」

「はい！！お世話になります！！」

ジャスパーは嬉しそうにシロに頭を下げた。

すると、すぐにシロは部屋を出て行こうと背を向けた。

「もう行ってしまうんですか？今、紅茶をお入れします」

「こんなところに用はない。茶も要らぬ」

冷たく言い放つと扉を開け出ていった。

シロのそっけない態度に肩を落としたたずむスミレにジャスパーは近づき、

「元氣出せよ」

そう言ってスミレの背中を軽く叩いた。

第3章？ 災いの訪れ（後書き）

ありがとうございました！

元気出せよ！

シロ君の態度…スミレとの関係も気にしていただければと思います。
3章はなんやかんやすごいことにしていきたいと思えますので、ど
うぞよろしくお願いいたします。

第3章？ 不機嫌王子（前書き）

突然やってきた謎の少年ジャスパー。不機嫌極まりないシロ様にはその存在は一体どう映っているんでしょう？

スミレとシロ様の関係、シロ様とクロの関係：色んなことが交錯中
…

第3章？ 不機嫌王子

「剣の稽古？」

「はい、よろしくお願いします！！ジャスパーと申します！！」
ジャスパーの威勢のいい声が中庭に響いた。

シロに言われその足ですぐにクロのもとを訪れたいとジャスパーにせがまれ、スミレたちは城の中庭で一人、花の水やりをしていたクロを捕まえた。

「なぜ刀を？」

ジャスパーの腰にある刀を見ながらクロは尋ねる。

「こいつは親の形見です。村を滅ぼした恐ろしい『鬼』を探して旅をしていました。昨日のあいつも似ていたけど違った…僕は全く齒が立たなかった…」

刀の柄を握り悔しい表情を浮かべるジャスパー。

「そうか…『鬼』と言ったのだったな…」

クロもまた何故か視線を下に落とした。

「待っている」

そう言うところクロはその場を離れる。

するとすぐに二本の木刀を持って戻ってきた。

「真剣同士では手加減ができません。しばらくはこいつで相手しよう」
ジャスパーに木刀を手渡す。

「よろしくお願いします！」

ジャスパーはすぐに構えに入る。
そして軽い動作で間合いを詰め、剣身を真上に掲げた。

「腹がから空きだ」

「いだーっ」

一瞬にしてジャスパーの腹部にクロの一撃が入る。
その瞬間の痛烈さにスマレは目を瞑った。

「どうした、もう終わりか」

腹を押さえてうずくまるジャスパーを見下ろしながらクロは近づく。

「へへっホントだ。強い…」

ジャスパーの口許が上がり、その手がまた木刀を握り直す。

「まだまだあー!!」

すぐに立ち上がりクロのもとへ駆ける。

だが木刀は簡単に弾き落とされた。

「握りが力みすぎる。力をもっと抜け」

「ちきしょう!!」

何度も何度も向かつては弾かれを繰り返す。

ジャスパーの呼吸は一気に乱れ、足元もおぼつかなくなる。

それでも諦めることなく力の入らない手で木刀を握り向かっていった。

「敵討ち…か…」

終わることのない二人の打ち合いを椅子に座って見ていたスマレは、
ジャスパーに自分の姿を重ねる。

そしてちょうど中庭の見下ろせる窓からは、その光景をただじっと見つめるシロがいた。

「スミレ！！起きろ！！稽古の時間だ！！」

次の日、身体中に絆創膏やら湿布やらを貼りつけられたジャスパーに朝早くから起こされた。

「こんな早くから？」

まだ開ききらない目を擦りながら布団から降りる。

「クロさん忙しいから朝と晩の空いてるときになったんだ！！」

あんなに痛み付けられたのに何故か嬉しそうで楽しそうな顔でスミレを見る。

「勝手に行っていていいか？スミレを待ってたら稽古の時間なくなっちゃうよ！！」

ジャスパーはそわそわしながらスミレに言い寄った。

「あ、そうしてくれる？」

スミレがそう言うのと、ジャスパーはすぐにスミレの部屋から出ていってしまう。

ジャスパーが出ていってしまうとスミレはまた、布団に入った。

「起きろよ！！スミレ！！」

また、ジャスパーに体を揺すられ目を開ける。

「今度は何？」

スマレは布団から出ずに言葉だけ発した。

「スマレ、朝御飯食べたら仕事だぞ!!」

その言葉に眠気が一気に覚める。

時計を見ると起床時間ぴったりだった。

「わあゝ!!危なかった…ありがとう!」

スマレは慌てて寝巻きを脱ごうと服を捲る。

「わゝまでまで!!俺、外に出てるから!!」

ジャスパーが顔を隠して慌てて部屋の外に出ていった。

「変な子」

スマレは首をかしげ、気にせず制服に着替えた。

「かわいいゝなにこの子!!」

「この子じゃない!ジャスパーだ」

朝の食堂ではジャスパーの周りにたくさんの女メイドが集まってきた。

確かに、大人びた性格のようだが顔立ちは子供らしく可愛らしい。

そして、ジャスパー用にあしらったであろう使用人制服を着込んでいることも他のメイドの感性を刺激しているようだ。

一通り騒がれやっとな落ち着いてジャスパーと食事をするスマレ。

「こんな子供が出稼ぎ?」

そこにアヤメがやって来て、スミレの前に座り話しかける。
ジャスパーはアヤメを見るとスミレに向かって小声で呟いた。

「スミレの友達か？」

「友達と言うより、先輩かなあ。」

「スミレがお世話になってます」

いきなり立ち上がりアヤメに向かってお辞儀をする。

「は、はあ……」

そんな真面目な顔のジャスパーにアヤメは驚いて目を丸くした。

「目上の方にはしっかり挨拶せねばな!!」
得意気になってスミレを見下ろす。

「そうだね……」

「スミレちゃんて、シロ様にしろジャスパー君にしろ、そういう男に好かれるんだね。」

「すっ好かれるって!？」

つい声を大きくしてしまうスミレに、アヤメはにやにやする。

ジャスパーはここで稽古する合間、使用人として昼間は生活することとなった。

「スミレ、ここ終わったぞ、次は窓拭いちゃうか!!」

廊下の掃除をあっという間に済ませ、まだまだ余裕のあるジャスパーにどんどん仕事をとられてしまうスミレ。

「ちよっとペースを落としてえ。」

「なんだよ！頑張れって」

若いパワーに振り回されペースが乱れ慌ててしまう。

「張り切ってるようだな…」

後ろから聞き慣れた声がした。

その声を聞いた途端スマイレの胸は高鳴り緊張する。

意を決し振り向く。

「シロ様…」

やはり声の主はシロだった。

ペリドットとオリーブ、クロを従え、相変わらず偉そうに胸を張り立っている。

しかし、スマイレはシロに会えたことで、自分の中の複雑な思いに戸惑いを隠せない。

「なんだその顔は。少年に振り回されて大変そうだな」

いつもの意地悪だがどこか憎めない言葉とは違い、突き放す様な口調。

「シ、シロ様に振り回されるよりましです！」

スマイレは、そんなシロの冷たい様子につい反発してしまった。

シロの眉間にシワが寄る。

「おい、少年。その調子で、城の全てをきれいにしてくれよ」

シロは顎を上げ今度はジャスパーに声をかけた。

「はい、御恩はお返しするつもりです。僕は剣の腕を磨いて必ず復讐を遂げます。クロさん、よろしくお願いします！」

「ああ」

ジャスパーのひたむきな視線にクロは珍しく微笑んだ。

それも氣にくわなかったのか、シロがすかさず言葉を発する。

「ふん。スマレ、いい相方を持ったな。しっかり面倒見るよ。あ、見てもらえの方がいいか」

「シロ様、お言葉をお選びください」

陰悪なムードにオリーブが即座に対処する。

「剣を振り回すより、掃除の方があつてる気がするが…復讐など何の役に立つ？そんなことやめて、ずっとこいつの面倒を…」
まだ続くシロの悪態にスマレが我慢できずに、眉をつり上げシロの目の前に立った。

「シロ様！どうしたんですか？シロ様らしくないです！…この子の気持ちをお考えください！」

「スマレ…」

ジャスパーはスマレを見上げる。

「俺に口ごたえするとは、いい身ぶ…」

スマレの瞳から涙が滲んできた事に気づいたシロは口を閉じた。

「ちつ…行くぞ」

言葉をなくしたスマレを見ることなくシロはすぐにマントを翻し去っていつてしまった。

「シロ様！」

ペリドットだけがすぐに後を追う。

オリーブがその後ろ姿を見ながらため息をついた。

「エリカ様が帰られてから最近ずっとあの調子なの。すぐに周りに当たり散らして…何があったのかしら…」

子どものわがままに手を焼いているといった表情のオリーブ。

「…」

シロの不機嫌。

エリカのせいではないことにスマレとクロは思い当たる。

お互い目を合わせるが無言でクロは立ち去ろうとした。

「クロさん！！僕…いいんですよ？」

背を向けるクロにジャスパーが声をかける。

「ああ。また、今夜待っているぞ」

クロは振り返らず優しい声で言葉を残すと、すぐに歩いてしまった。

オリーブもその後をついていってしまふ。

「王子様、機嫌悪かったな…スマレ？」

ジャスパーがスマレを見ると、その瞳からは溜まっていた涙が溢れそうになっていた。

「ばかあ…」

たった一言だけ呟くと顔を手で覆いどこかへ走っていつてしまふ。

残されたジャスパーは手にした雑巾を見つめた。

「面白いことになってるんだ…」

その呟きは窓から吹き込む風の音にかき消された。

重装な造りのドアを軽い音でノックするものがある。

「シロ様…」

クロがドアに向かって声をかける。

「…入れ」

シロが返事をする、クロはゆっくりとその扉を開いた。

爽やかな香りの広がる広い部屋の奥の椅子にシロが腰掛け、ぼんやりと窓の外を見ている。

クロは静かにその傍らに近づいた。

「どうされたのですか？」

お互い視線を交わらせず窓の外を見る。

「…あの少年はどうだ？」

何かを考えながらシロはクロに訊ねた。

「いい筋をしている。素直で覚えも早く期待できます」
クロはただ思ったことだけを伝えた。

「そうか…」

それ以上はシロからは何も出てこない。

「シロ様も少しは見習ってください」

その言葉に素早く振り向き反論しようとしたが口を閉じた。

「はあ…スマレは怒っていたか？」

少しだけためらいがちにもう一つクロに訊ねる。

「ご自分でお確かめください」

クロは目を細め、シロを見た。

「俺以上にやな奴だな」

「シロ様、オレはあなたの味方でいたい」

突然、クロが優しい眼差しをシロに向けた。

「なぜだ…お前を引き取ったからか？」

クロの真意がわからず、シロは眉をひそめる。

「いいえ、大切な人だからですよ」

穏やかな表情でシロに微笑むクロに、シロも少し口許を緩めた。

第3章？ 不機嫌王子（後書き）

シロ様の株は大暴落！

ジャスパー頑張れ〜そんな感じ。

ちよつとだけ？色んなものを落としてる回です。
拾っていけるように今後も更新していきます！

ここまで、ありがとうございました！
次回をお待ちください！

第3章？ 荒れる森（前書き）

明けまして今年初投稿です。事件？は突然起こります。シロ様はど
んどん悪者となります（笑）そんな感じで三章三話目です。よろし
くお願いいたします。

第3章？ 荒れる森

「なんだこれは！！」

ある日の朝早くオニキスは怒りの声をあげる。

『純正団』の一員であるオニキスは低い身長にがっちりした体つきのドワーフという、人ではない種族であるが、王子であるシロに城内の森の管理を任されていた。

オニキスが管理する森の木々は所々倒され、草花は踏み荒らされている。

まるで何か大きな野獣が暴れまわったかのようなだった。

その光景に困惑よりも先に怒りが湧き上がる。

「お前のところもか…」

やり場のない怒りを抱くオニキスの後ろから、イキシアの透き通る声がした。

しかしその中にはオニキスと同じ感情が隠れているのは顔を見なくとも感じ取れる。

「何かが侵入したということか？」

結界に守られている城にこのような爆発的な力を持つ輩が侵入したとは考えにくい。

「いや、どうやらそうではないようだ…」

それは、イキシアも分かっていたようだ。

そんなことを言うために、犬猿の仲であるイキシアがオニキスに話しかけるわけもない。

「お前のところも、ということとは、イキシアのバラ園もか？」
オニキスは折られた木の幹を掴み、イキシアに訊ねた。

「復興には時間がかかりそうだ…これから作業にかかるころだ。
お互い、時間の問題だろう？」

「森が泣いておる…早く元通りにしてやらんと…」
落ち着きを取り戻したオニキスが倒木を拾い立て始めると、イキシアはすぐに背を向け去って行った。

「スマレ、仲直りはしたのか？」

「なにが？」

「おーじさまとー!!」

からかったつもりของ ジャスパーはスマレの反応が悪いことに気づいて言葉をつまらせる。

「あの、ごめん…」

「ごめん…素直にそういえばいいのにね…私ったら何ムキになつて」

スマレは俯き声も小さくつぶやいた。

そんなスマレをジャスパーはじつと見つめると、その背中にそっと触れる。

「でも、オレは嬉しかったよ！かばってくれて」
スマレの視界に割り込み、ニコツと笑顔を見せた。

「ジャスパー…そうだね…次、会ったらちゃんと謝らないとね!」
ジャスパーの優しさと明るさにスマレも笑顔を取り戻す。

「じゃあ、オレ、朝稽古いつてくる!!」

そういうとジャスパーは結び上げている髪を揺らしながら嬉しそうに部屋を出ていった。

しばらくして、スミレが制服に着替えているときドアが軽くノックされる。

「ジャスパー?…今日は中止だったの?開いてるよ」

ドアを開く音が聞こえたが、またすぐに閉まる音がした。

スミレは振り返るが誰も入ってきていないことに首をかしげる。すると、外から声が聞こえた。

「無防備にも程がある…」

想像していなかった人物の声にスミレの動きが止まってしまふ。

「早く服を着ろ」

着替えの続きだったことを思いだし、スミレは恥ずかしさで顔が真っ赤に染まった。

慌てて制服を着ると鏡の前で髪型をチェックする。

大きく鳴り響く胸の鼓動を感じながら、ドアの前に向かう。

「私、なんで緊張してるんだろ…平常心っ!」

そしてドアを開けた。

「遅い…どれだけ待たせるんだ。」

機嫌を損ねたシロの表情にスミレはすぐに威圧されてしまふ。

「そそ…そんな風に言わなくても…」

「平常心はどうした?」

「聞こえてたんですか？」

「独り言は小さくしろ」

「はい…」

シロはいつもと変わらない雰囲気だった。

しかしスミレとの間には大きな壁があるように感じる。

「どうでもいいが、クロを見なかったか？」

シロは、そんなスミレの事などお構いなしに話しかけた。

「え？クロさんがどうしたのですか？」

「いや、昨晚から姿を見ないのだが…来ていないのなら用はない」
そう言うと共に背を向けた。

「あの！」

そのままシロを見送ればよかったのに、なぜかスミレは引き止めてしまう。

「なんだ」

視線だけをスミレに向け、シロは立ち止った。

「えっと…」

引き止めるのがそんなにいけないことだったのか、相変わらず、機嫌が悪そうなシロの態度にスミレは首をすくめてしまう。

「用がないなら引き留めるな。お前にそんな権利はない」

「なっ…シロ様、変です。何かあったのですか！？」

こんなことを言いたいのではない。

スミレが聞いたところで、返事などもらえるわけもない事は分かっていたのだがそこに居て欲しかった。

「オレは変わらない。…これが正しい関係だろう」

もうこれ以上は構っていられないようで冷たく言い放つとさっさと歩いていってしまった。

スミレはまた肩を落とし、下を向く。

すると、向こうから小走りで走ってくる音が聞こえスミレの前で止まった。

「なあ、クロさんどこ行っちゃったんだよ？」

スミレの目の前には木刀を片手に持ったジャスパーが首をかしげながら立っている。

「また、謝れなかった…私こそ、どうしちゃったんだろう…」

スミレは、言いたいことも言えず、よくわからない感情に胸が締め付けられていた。

その日クロが失踪した。

無断でどこかへ行くとは考えられない。

シロも見当がつかないほどに突然で、城内もその話で持ちきりだった。

シロとの一件も持ち直してきたのだが、なぜかまだ胸騒ぎがする。

「クロさんはどこにいるんだ…」

「わからない…」

空き時間にジャスパーとスミレは城内を探索していた。

しかし失踪に関する情報は全くつかめない。
すると後方からバタバタと走る音がした。
振り返るとペリドットが息を切らせて走ってきた。

「クロさん見ませんでしたか？」

「それが、こちらも探してるんですが。もしかしてシロ様が原因で家出したとか!？」

スマレが自分と重ね、クロももしかしたら不機嫌王子の餌食になったのではと、ペリドットに訊ねる。

「ははっそれはないですね…我々にはあんな態度ですが、シロ様はクロさんにはいつも通りでしたから。だからこそ心配なのだとシロ様が…それに…」
和みながら話をしていたペリドットの表情が、何かを思い出し曇った。

「どうしたんです？」

「どうやら妖魔の目撃情報がありまして…」
時間が止まったかのように3人は固まる。

「え」

「どこです!?!鬼ですか？」

ジャスパーがスマレの脇から体を前に出し、ペリドットに言い寄った。

「いや、そこまでは。あくまで目撃したと触れ込みがあっただけで…翡翠さん、アズライトさん、アイリスさんがそちらに当たられるんですが」

その表情に微かに不安を浮かべながらペリドットが言う。

「シロ様は!?!」

「はつきりと情報がつかめれば現場に向かわれるでしょう」
スミレの胸が不安で一杯になった。

「では、見つけたら連絡を！私も探して参ります」

「はい！！」

ペリドットはこんなところで立ち話などしている場合ではないと、すぐにどこかへ走り去った。

「僕も、…」

「待つて！もしかしたら…森の方かも…」

スミレはジャスパーの腕を掴むといつかクロと足を運んだバラ園のある森へ走り出した。

「何があつたんですか！？」

その変わり果てた景色を見てスミレたちの足が止まる。

無言でオニキスが木々を集めている。

スミレに気づき顔をあげた。

「ひどいことをするやつもいたものだ…バラ園もやられていたらしい…」

妖魔の討伐に二人の名前がなかったことに納得する。

「イキシアの方にシロ様も向かつてるようだが…」

「え…」

その名前を聞き、急にスミレの体が動かなくなる。
あんな会話しかできずにいる。

また、会ってしまったのが怖かった。

そんなスミレの表情を伺っていたジャスパーがスミレの手を握る。

「行こう」

今度はジャスパーがスミレを引つ張り森の奥へ走った。

やがて甘い香りが広がりバラの丘へ出る。

しかし、森の光景と同じようにあんなに咲き誇っていたバラは色を翳^{かげ}らせ地面がむき出しになっていた。

「ひどい……」

「なにかが暴れまわったみたいだな……」
冷静にジャスパーが言葉を発する。

「そのようだ……」

「お前たち、なぜここに来た？」
後ろからイキシアとシロが話しかけてきた。

二人ともスミレを見ることなく、悲しげな表情の裏に怒りを秘めた瞳で丘を見つめている。

「この子供は？」

イキシアがジャスパーの視線に気づきその姿をまじまじと見降ろした。

「ジャスパーと言います。お城でお世話になってます！ クロさんに剣を教えてもらってますが、どこにいったかご存じではないですか！？」

丁寧話すジャスパーにイキシアは警戒を解いたように目を細めた。

「クロ殿が？」

「…あなた、エルフですか？」
イキシアを見ていたジャスパーから意外な言葉が漏れる。

「そうだが…」

「さすが、ウエンダブルですね！！先ほどのドワーフの方と言い…
ここには色々な方が住まわれているんですね！」

ジャスパーが声を荒げ、興奮した様子でイキシアの前に立った。

「…しかし、なぜ、堕ちてこられたのですか？神の国の住人ではないのですか？」

饒舌に話すジャスパーにイキシアは、今度は不審な目を向ける。

「口を慎め」

イキシアの憤りを感じたシロが、冷たく言い放つと、ジャスパーの肩を掴む。

「シロ様…」

「お前、昨晚クロの様子に変わったことは？というか夜の稽古はやつたのか？お前、昨夜は何をしていた？どこにいた？」

シロが何を言いたいのか全くわからないがジャスパーに対する口調がまた厳しくなっていく。

ジャスパーもシロの剣幕に押され、顔が強張る。

「もしかして、お前がやったんじゃないのか！？」

ついに最悪の一言を口にした。

次の瞬間、スミレの手がシロの頬を勢いよく叩く音が花園に響き渡った。

叩かれた頬を手で抑え、シロはスミレを睨んだ。

スマイレの瞳には涙が溜まっている。

「見損ないました」

そう言うで一筋の涙が零れる。

「…いけ…」

小さくシロが呟いた。

「出ていけ…」

その言葉を聞くなりスマイレは後ろを向いて何も言わず足早に歩き出す。

スマイレの瞳から流れる涙は止まりそうにない。

「スマイレ！俺も行く！」

後ろからスマイレを追う足音が聞こえ、その横で止まる。

ジャスパーが申し訳なさそうな顔でスマイレを見上げるとあとは無言でふたりは荒れた森を歩いた。

「良かったのか？」

イキシアが黙り込むシロにバラを拾い集めながら話しかける。

「これでいい…この国から出てくれた方が…」

うつむきながら聴こえるか聴こえないか程に小さな声でシロは答えた。

その時、冷たく強い風が吹いた。

丘の向こうには分厚い黒い雲が姿を見せている。

「天気が荒れるな…」

イキシアが空を見上げ呟いた。

第3章？ 荒れる森（後書き）

ただの性格の悪い王子様はどうでしたか？ご覧いただきましてありがとうございます。ジャスパー：彼にも注目していただきたと思います。次回はスミレたち家出する編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3258u/>

シロ×クロ

2012年1月10日21時46分発行